十全同窓会会報 186

2024 / 1

目　次 | CONTENTS

新年のご挨拶……03
就任挨拶……04
岡田晃名誉教授を偲んで…07
受賞……08
学会報告等……14
金沢から世界へ発信……19
十全学術行脚……20
医学展2023 ……23
病院紹介……24
教室だより……26
支部だより……28
クラス会……34
十全昔話……35
令和5年度白衣授与式 ……36
金沢大学医学生と
「生と死」を考える……38
学生コーナー……40
学生課外活動報告……42

緊急 「令和６年能登半島地震 災害救援募金」のお願い

令和６年元日夕刻の能登北部を震源とする大地震による惨状は、皆さまマスメディアの報道でよくご存知の事と拝察します。不幸にもお亡くなりになった、あるいは被災された皆さまに、心から哀悼の意とお見舞いとを申しあげます。

この文を書いている時点（令和６年１月５日）でも、能登北部には孤立した被災者、停電・断水に加え、水・食料・燃料が底を突いた避難所で救助を待つ被災者が多数存在します。全国から参集され、災害救助にご尽力をいただいている皆さまに、心から感謝を申しあげます。

われわれの仲間である能登北部基幹病院の医師の皆さんは、祝日体制の人数と医療資源で、元日夕方の発災以来、被災者の治療に不眠不休で奮闘しておられます。十全同窓会として、これらの同窓生の皆さまに経済的な支援をお贈りするため、会員の皆さまに募金のお願いを申しあげる次第です。

以下の送金方法のいずれかを経由して、十全同窓会へ募金をお寄せ下さい。皆さまからお寄せいただいた浄財は、能登北部の中核病院である市立輪島病院（病院長 品川 誠 先生、昭和58年卒業）と珠洲市総合病院（病院長 浜田 秀剛 先生、昭和59年卒業）に使途を限定せず寄附させていただきます。

募金額は一口１万円とし、２口以上をお願いいたします。

①下記銀行口座へ直接振り込みが可能です

北陸銀行　小立野支店
普通預金　6051047
金沢大学医学部十全同窓会 令和6年能登半島地震 災害救援募金

（お振込の際は、ご氏名の前に**会員番号もしくは卒業年**のご入力をお願いいたします）

②郵便振り込み用紙を同封しておりますのでご利用ください

領収書は、払込取扱票の受領証をもって代えさせていただきます。
募金に対する免税措置はございませんので、予めご了承ください。

平家物語 巻十二 百七十九（大地震）「たゞかなしかりけるは大地震なり。鳥にあらざれば空をもかけりがたく、龍にあらざれば雲にも又のぼりがたし」の一文に深く心を打たれます。

皆さまのお力添えを伏してお願い申しあげます。

2024年１月10日
金沢大学医学部十全同窓会 会長　山本　　健

問合せ先　金沢大学医学部十全同窓会事務局　Email：juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

新 年 の ご 挨 拶

十全同窓会会長
山本　　健

いそうだがいない医院で値切る人　（毎日新聞万能川柳）

新年明けましておめでとうございます。十全同窓会会員の皆さまにおかれましては、ご健勝に新春をお迎えのこととお喜び申しあげます。年頭に当たり、ご挨拶を申しあげます。

医学類新卒者の十全同窓会への帰属意識を高める試みとして、昨年に続いて、臨床実習を開始する医学類４年生の諸君に、十全同窓会から長袖の白衣を贈呈しました。2023年10月26日（木）午後、十全講堂で開催された臨床実習生（医学）認定証および白衣授与式の場で、贈呈を行いました。本号の白衣授与式報告記事（36頁）をご参照ください。

新型コロナウイルス感染症が第２類感染症から第５類感染症へ分類変更されたことに伴い、全国の支部総会が次々と開催されています。最近ある支部総会で耳にした、心に残るエピソードをご紹介します。

主人公は、現在関西地区でご活躍の同窓会員、O先生。今を去ること30数年前に関西から金沢大学医学部医学科に入学され、浅野川に近い橋場町の下宿に住んでおられました。橋場町から浅野川大橋を渡り、城北大通り（旧北陸道、現国道359号線）に面した理髪店へ散髪をしに行かれたときに、関西人としての習慣からか「代金を値切った」そうです。理髪店の親父さんに「散髪料金はわたしの技術を反映するもの。まけるわけにはいかない」と懇々と諭されて納得しそうになったものの、親父さんは最後に代金を少しまけてくれ、この新入生を送り出したそうです。O先生はその後、値切らずにこの理髪店を贔屓にされました。

旧制四高の時代から、金沢市民には学生を大切にする気風があったと聞きますが、その伝統が30数年前にも生きていたことを知り、嬉しく思いました。こういうお話しを聞くと、さらに深掘りしたくなります。O先生が行きつけにされた理髪店を特定し、そこの理髪師さんに「昔、散髪代を値切った学生さんを覚えていませんか」とお尋ねしました。理髪師さんはすでに代替わりしておられましたが、散髪代を値切るお客さんは流石に珍しかったらしく、「父親が店主だった頃、そのようなエピソードがあったことを覚えています。わたしも（理髪師として）その場に居ました。父親がどの様な言葉で学生さんを諭したかまでは、残念ながら覚えていません。父親はすでに故人です」とのお話しを伺うことができました。

因みに、私の行きつけの理髪店主に確かめたところ、金沢市の理髪料金には一定の基準がなく、警察の肝煎りで理髪料金を統一した戦後の一時期を除いて、各店主が同業者の価格設定を参考に、自主的に理髪料金設定をしているとのことでした。

会報185号（2023年9月）の「学長メッセージ」でも触れましたように、和田隆志学長は、金沢大学未来ビジョン「志」を各支部会員の皆さまにご紹介し、ご意見をお聞かせいただきたいと希望されており、各支部の総会への出席を希望されています。各支部長におかれましては、近い将来にそのような機会を設定いただくようお願い申しあげます。何よりも事前の日程調整が重要ですので、1年以上先の支部総会のご予定を同窓会事務局までお知らせいただければ日程調整をさせていただきます。よろしくご検討ください。

本年が同窓会員の皆さま、金沢大学医学類・医学系ならびに十全同窓会にとり、昇龍の勢いに満ちた一年になりますことを祈念し、新年のご挨拶と致します。

就 任 挨 拶

出村　諭　博士
（平成7年卒業）

金沢大学医薬保健学域医学系・整形外科学教授に就任

風通しの良い ユニバーサルな教室運営

　このたび皆さまからのご指導・ご支援をいただき、令和5年11月1日より金沢大学医薬保健学域医学系・整形外科学教授を拝命致しました。十全同窓会の先生方に一言ご挨拶を申し上げます。

　私は平成7年に金沢大学医学部を卒業後、直ちに富田勝郎教授の主宰する整形外科学教室に入局しました。その後、関連施設において整形外科全般を研修した後に、平成14年に同窓の高橋啓介教授の指導の下、埼玉医科大学整形外科で脊椎疾患の臨床研究に携わる機会をいただきました。平成16年に金沢大学整形外科に帰学し、現金沢医科大学病院長・整形外科教授の川原範夫先生より、脊椎腫瘍を中心とした研究、治療のご指導をいただき、平成19年に脊椎疾患の手術侵襲に関する研究で学位を取得致しました。平成22年よりPeter Newton教授主宰の米国カリフォルニア大学サンディエゴ校、Rady Children's Hospitalにおいて、側弯症に関する研究の機会をいただきました。帰国後は土屋弘行教授ご指導の下、脊柱変形、脊椎腫瘍、脊椎感染症を中心に診療、研究に従事してまいりました。令和元年からは金沢大学附属病院脊椎・脊髄外科長として、脊椎疾患を中心に後輩の指導にあたってまいりました。

　今後は、初代高瀬武平教授、第２代野村進教授、第３代富田勝郎教授、第４代土屋弘行教授のご尽力により築かれた当教室の伝統や業績を基盤として、金沢大学、そして整形外科学教室の発展に向けて邁進する所存です。

　十全同窓会の先生方のご支援により、金沢大学整形外科で教育、研究、診療に関わらせていただく機会を私に与えてくださったことに深く感謝しております。今後とも先生方からのご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

秋の叙勲

瑞宝中綬章
小島　靖彦（昭和45年卒業）

瑞宝小綬章
村北　和広（昭和51年卒業）

瑞宝双光章
今野　利男（昭和45年卒業）

林　　克洋　博士

（平成9年卒業）

金沢大学医薬保健学域保健学類理学療法学専攻教授に就任

金沢大学で教育を受けたことに誇りを持つような人材育成を

令和5年10月より金沢大学医薬保健学域保健学類理学療法学専攻の教授に就任しました。金沢大学整形外科学教室では、富田勝郎名誉教授や土屋弘行名誉教授をはじめ、多くの先生方にご指導していただき、心より感謝申し上げます。

振り返ってみますと、平成9年に金沢大学医学部を卒業後、整形外科医として手術や外来など臨床経験を積んでいましたが、医師7年目に、大学に戻り研究をして博士号をとるかどうかの分岐点がありました。臨床だけではやや物足りなさを感じた時期でもあり、研究をする選択をしました。大学では一般病院ではみられない骨肉腫などの希少がん患者を担当する傍ら、実験を行なったり、論文を書いたりと、向学心や探究心を満たす充実した日々でした。やがて米国サンディエゴで癌細胞の蛍光イメージング研究に留学する機会もいただき、海外での研究や病院見学をしてみたいという希望も現実となりました。帰国後は後輩の指導や、他県大学への出向単身赴任などもありましたが、多くの仲間と常に刺激的な医師生活を送らせてもらいました。今回、保健学類の教授という身に余る立場をいただき、整形外科臨床や研究を継続しつつも、教育という大きな使命も頂いた感です。実際、解剖の講義などをするにしても、自分の臨床経験を元に話したり、医療人としてのスタンスを教えたりもしています。定年まで折り返しを過ぎた身としては、自分の医療経験を若手に伝えるよい機会をもらえたなと思っています。十全同窓会会報を読んでいる若手医師も、これから人生の分岐点がいくつかあるかと思いますが、ぜひ色々な経験を積んでもらえればと思います。

保健学類でも地方の人材不足、高齢者医療、VRを活用した医療革命など、さまざまな課題や研究分野があります。自分がこれまで金沢大学で育てていただいたように、金沢大学で教育を受けたことに誇りを持ち、地元に愛着を持つような人材を育成していきたいと思っております。これからも何卒よろしくお願い致します。

野崎　一朗　博士

（平成13年卒業）

国際医療福祉大学塩谷病院脳神経内科病院教授に就任

スタッフの育成に貢献し神経変性疾患の研究に精進

このたび、令和5（2023）年4月1日付けで国際医療福祉大学塩谷病院の脳神経内科病院教授を拝命致しました。

私は平成13（2001）年3月に金沢大学医学部を卒業し、当時山田正仁教授の主宰する金沢大学神経内科学教室に入局致しました。神経内科の臨床研修を行ったのち、平成16（2004）年に大学院に入学しました。血管分子生物学教室・山本博教授のご指導のもとアルツハイマー病の発症メカニズムに関する基礎的研究にて平成20（2008）年に学位を取得しました。

その後は北陸地方の関連病院で神経内科医として研鑽を積み、平成27（2015）年から2年間、ドイツのボン大学再建神経生物学研究所のHarald Neumann教授の主宰する神経再生部門に留学し、アルツハイマー病の遺伝的リスクと炎症メカニズムについて研究を行いました。帰国後は神経変性疾患を中心に臨床および基礎研究を行ってまいりました。

臨床や研究のより一層の修練を模索しておりました折、ご縁あって国際医療福祉大学に採用していただくことになりました。ご推薦いただきました金沢大学脳神経内科・小野賢二郎教授に深謝申し上げます。

国際医療福祉大学医学部は今年初めての卒業生を出したばかりですが、医師国家試験合格率は全国2位と非常に優秀な成績を収めています。金沢大学で学んだ経験を活かしつつ、最先端の知識、臨床技能を有するメディカルスタッフの育成に貢献できるよう努めていく所存です。また、自身の専門分野である神経変性疾患の研究にも精進してまいります。

金沢大学十全同窓会の先生方には引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

就 任 挨 拶

山田　和徳　博士
（平成20年度大学院修了）

金沢医科大学医学教育学特任教授に就任

変化の中で、人間性豊かな良医を育成することに尽力したい

令和5年8月1日に金沢医科大学医学教育学講座の特任教授を拝命致しました。私は、平成10年3月に新潟大学を卒業し、4月より馬渕宏教授が主宰されます金沢大学旧第2内科に入局しました。その後、腎疾患、リウマチ膠原病疾患に興味を持ち、紺井一郎先生がチーフの第3研究室に入室致しました。その後、川野充弘先生にご指導いただき、IgG4関連疾患の臨床および研究を開始致しました。また、リウマチ・膠原病全般について診療する機会をいただきました。この経験を通じて、「全身を診る」ことの重要性を学びました。

平成21年9月より1年間、ジュネーブ大学Pathology and Immunology（出井章三教授）に留学する機会をいただき、自己抗体の解析を行いました。帰国後は、主にIgG4関連疾患のモデルマウスの樹立や多施設共同研究でIgG4関連疾患の臨床像の解析を行いました。

平成31年4月より、金沢医科大学血液免疫内科学の准教授として着任し、リウマチ診療、学生指導に従事しておりました。令和5年8月より、医学教育学特任教授を拝命し、血液免疫内科学を併任する形となりました。

医学教育に関しては、近年、大きな変化がございました。令和5年度より、医学生が臨床実習で行う医業が法的に位置付けられ、CBTや臨床実習前OSCEが公的化されました。また、モデル・コア・カリキュラムが改訂され、令和6年度入学生より適用されることになりました。このような変化の中で、自分自身のこれまでの経験を生かし、学生さんが安心して学べる環境を整え、本学の建学の精神であります人間性豊かな良医を育成することに尽力してまいりたいと思います。金沢大学十全同窓会の先生方には、引き続きご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

教授退職記念講演会のお報せ

謹　啓　時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます

さて 金沢大学医薬保健研究域医学系（眼科学分野）杉山和久教授・（産科婦人科学分野）藤原浩教授には令和6年3月31日をもって医学系教授を御退職されます

つきましては 左記のとおり記念講演会を挙行することとなりましたのでご案内申し上げます

記

記念講演会

日　時　令和6年3月8日（金）午後3時　から

場　所　金沢大学宝町キャンパス　十全講堂1階ホール

（記念講演会後の記念式は行いません）

令和6年1月吉日

謹　白

金沢大学医薬保健研究域医学系長

杉山　和久

事務担当　医薬保健系事務部総務課総務係

（電話番号　076－265－2100）

岡田晃名誉教授を偲んで

衛生学・公衆衛生学教授　中村　裕之

巨星落つ

金沢大学名誉教授、岡田晃先生は令和5年10月3日、ご逝去されました。93歳の輝かしい人生を白駒の如くに走りぬけられました。先生を知る人は、その訃報に接し、皆が「巨星落つ」と嘆かれました。

岡田先生は、1954年北海道大学医学部医学科をご卒業され、1959年福島県立医科大学助教授、1967年札幌医科大学教授、1972年金沢大学医学部教授、1990年同医学部長、1993年金沢大学学長にご就任になられました。2000年には金沢経済大学学長にもご就任になられておられます。金沢大学学長時代には、金大移転に伴い、城内キャンパスで最後、移転先の角間で最初の学長となられ、教育学部再編成など大学改革に絶大なる指導力を発揮されました。

特筆されますのは、日本公衆衛生学会(1972年)、日本民族衛生学会(1978年)、日本産業衛生学会(1988年)、日本宇宙航空環境医学会(1989年)、大気汚染学会(1990年)、日本衛生学会(1994年)、日本温泉気候物理医学会(1991年)、日本体力医学会(1991年)などの衛生学・公衆衛生学関連の学会のほとんど全ての学会長を務められましたことです。国際手腕振動会議、国際環境複合影響研究協会会議の学会長もされるなど、国際的にもご活躍されました。また1985年から1994年には日本学術会議会員に選ばれ、第7部(医・歯・薬学)長にもご就任になられ、日本の医学界の舵取りもされ、今の日本の医学と医療領域に大きなご貢献をされました。

1988年に国際環境複合影響研究大賞、1989年に第12回石川テレビ賞、金沢市文化賞、1992年に労働大臣功績賞、2006年に叙勲　瑞宝重光章など、数々の賞を受賞され、輝かしい学問上の業績と地域医療に対するご貢献が高く評価されました。学会長を多く勤められ、また学会の役員を長年にわたり、数多く務められましたので、学会関連では最後の大ボスだとも言われ、発言力も大きく、全霊を込めて後進の育成に注力されました。その一端は、「新健康管理論」、「新衛生公衆衛生学」、「図説公衆衛生学」、「環境科学」などの学生の教科書を、今の私どもには想像もつかないぐらい、ほぼお一人で執筆されるぐらいのエネルギーに満ちておられ、衛生学・公衆衛生学や社会医学の領域に多大なご貢献をされました。

特に岡田先生の学問上の業績は、物理的環境因子の生体影響の解明にあります。手腕振動と全身振動のヒトへの影響を体系的にご研究され、振動障害の概念を世界的に確立されました。まだ岡田先生が金沢大学の教授にご赴任になられた頃は、森林作業などで用いるチェンソーから発生する手腕振動の生体影響は、手腕系への影響だけでなく、頭痛や睡眠障害、泌尿器系や生殖器系への影響など自律神経系への影響も含めた概念が広く行きわたっておりましたが、岡田先生は、当時の産業医学の状況が、全身振動(全身に対して作用する建設現場などで使用される地ならし機の運転手に曝露されている全身に及ぶ振動)による自律神経系への影響を、手腕振動と混同していると主張され、ご自身の研究成果とともに国際的な知見を整理し、今の基準であります局所にしか影響をもたらさないという手腕振動障害の概念を確立されました。このように岡田先生は産業医学の分野で極めて多大なご功績がありますが、岡田先生の持ち味であられます学会での論客としての強い意志と信念がなかったら、現在の国際基準に辿り着かなかったとも言えます。振動障害に関する業績を著書「手腕系振動(英文)」や「物理的環境因子の複合影響(英文)」などで著されております。

岡田先生は、このように明確な論理と言葉が極めて卓越されておられましたので、学会だけでなく、医学関係の委員会や大学の運営などさまざまな領域に影響力があったと言えます。恩を受けた人をずっと大切にし、また指導者としてのご自分を慕ってついてくる人を徹底的にかわいがって指導や教育をされてこられました。岡田先生は、生涯にわたって、「白駒の隙」を３度ご出版されました。その先生の自叙伝ともいえるこの本の中では、先生が逐一、ご執筆された論説や随筆など、大変、きめ細かく整理されています。やはり驚きますのは、無数の大学などの学問の先生、文化人、政治家が登場し、先生との関りを述べられておられ、また本の中では、先生のご業績を称える新聞記事や他の本の引用もあり、これらも大変、緻密に正確にかつ客観的に纏め上げられていることです。岡田先生がいかに人間関係を重視し、人のために尽くして人の役に立ちたいという最も先生らしい一面が垣間見ることができます。皆、異口同音に、明るく楽しく人間関係を築くことは岡田先生の天性であると述べられていますように、岡田先生はいつも人生の相談役であったと思います。

岡田先生のお弟子さんで作る同門会を晃樹会(こうじゅかい)と言いますが、その宴会の最後に「岡田節」を皆で歌うのですが、それは「加賀の山々　陽に映えて・・人は石垣　人は城　情けは味方　仇は敵・・雲と興れや　岡田武士　岡田武士」という歌詞です。まさしく武田節を「岡田節」に変えたのですが、人を大事にした岡田先生が最も愛した唄であり、晃樹会の象徴でした。

このような岡田先生の輝かしいご業績は末代まで語り伝えられることと思います。130人を超える医学博士を育てられました。金沢大学、金沢医科大学、富山医科薬科大学、滋賀医科大学、琉球大学医学部、旭川医科大学、順天堂大学医学部などにも教授を輩出されました。先生の不肖の弟子の1人として、つい最近まで、叱咤激励してくださり、突然のご逝去に言葉もありません。いつも弟子たちの行く末を時には厳しく、また心から優しくご指導をしていただきました。岡田先生のご業績を引き継ぎ、発展させることが弟子たちの岡田先生に対する恩返しだと存じ上げる次第です。岡田先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

受　　賞

令和5年山梨県県政功績者表彰を受賞して

中巨摩医師会長
田邊　譲二
（昭和47年卒業）

令和5年11月20日に山梨県の保健衛生向上に努めたとして、県政功績者表彰を受けました。

中巨摩医師会は甲府市の郊外に隣接している地域で南アルプス市、中央市（山梨大学医学部所在地）、昭和町および甲斐市にまたがる3市1町で医業をする医師会員183名（A会員118名、B会員65名）の一般社団法人です。公立病院がない地域で全員参加型の一次救急在宅当番医制度を踏襲してきましたが、医療資源の偏在、医師の高齢化さらには2024年度からの「医師の働き方改革」などにより、開業医の全員参加型一次救急当番医制度は継続困難となり諸会議を経て、2024年度5月中旬から365日午後6時から11時まで山梨大学医学部附属病院にて一次救急センター開設と＃7119（救急案内）（救急安心センター）を骨子とした事業が開始される予定です。また山梨県医師会理事として全国有床診療所連絡協議会委員会に出席しています。令和5年12月3日（日）に小石川療養所開設301周年と言う事で「有床診療所の日」記念講演会が日医会館で開催されました（有床診療所の日は12月4日です）。日医会館では金沢大学同窓生にお会いすることがあります。

今後ともご指導よろしくお願いします。貢献寿命（？）延長に努めたいと思います。

北國文化賞受賞

杉山　和久
（昭和59年卒業）
金沢大学医学系長・医学類長・眼科教授

この度、北國文化賞という栄誉ある賞を令和5年11月3日に受賞しましたので、ご報告致します。私は、金沢大学医学部を昭和59年に卒業後、研修医時代も含めて約40年にわたり医学の眼科学分野の中の「緑内障」について研究、診療、教育を行ってきました。緑内障は日本および先進諸国の失明原因の1位であり、有病率も非常に高い疾患です。平成14年に金沢大学眼科教授に就任以降は、石川県を含む北陸地方には当時皆無であった緑内障の専門医として、多くの緑内障患者さんを失明から救うとともに、若手の緑内障専門医の育成を行ってきました。また、眼科教授として約21年間にわたり、「緑内障による失明ゼロ」を目指して研究・診療を行い、日本のみならず世界的に評価される数々の賞を受賞し、日本眼科学会、日本緑内障学会の理事をはじめ、世界のトップ100人の緑内障研究者で作る国際緑内障研究会議のメンバー、世界緑内障連盟の理事を日本の代表として長年務めてきました。

具体的には、緑内障性視神経症の病態解明、眼圧日内変動の機序、個々人に最適な薬物治療、神経保護、レーザー治療と手術の合併症の克服など緑内障のほぼ全ての分野において、臨床的に重要と思われる諸問題を抽出し、科学的アプローチにより問題点の本態を解明し、解決策を探求してきました。視神経に不可逆的傷害をおこす緑内障は、早期発見が必須であるため、平成20年から15年にわたり金沢市医師会緑内障検診に検診委員長として参加し、指導してきました。

北陸3県に、緑内障診療を根付かせ、世界最高水準の医療と研究を行い、多くの緑内障患者を失明から救うことが今度の受賞につながったものと思います。

令和5年度日本運動器科学会 学術プロジェクト受賞

加藤　仁志
（平成13年卒業）
金沢大学附属病院整形外科

この度、研究課題『加齢性の脊柱後弯症に対する革新的な保存療法（装具療法と運動療法）の効果検証』が令和5年度日本運動器科学会学術プロジェクトに採択されましたので、ご報告致します。日本運動器科学会は、整形外科が診療する運動器（骨、関節、筋肉、神経など）の疾患に対するリハビリテーションの普及や研究に取り組んでいる学会であり、近年ではフレイル、ロコモティブシンドローム（ロコモ）の活動に力を入れています。超高齢社会を迎えた日本においてフレイル・ロコモの問題は喫緊の課題となっており、この対策は健康寿命の延伸、国民のQOL向上、社会保障費の削減に関わる最重要課題といえます。当科では、慢性腰痛患者、特にロコモを有する世代である中高齢者に適した体幹運動器具RECOREを開発し、この器具を用いた体幹安定性評価の意義や運動療法の有効性を検証してきました。現在、病院やクリニックで臨床応用され、大学研究機関においても使用されています。この度、加齢に伴う腰曲がり（脊柱後弯症）に対する新たなコンセプトを有する軟性装具の開発に取り組んでおり、その臨床的評価を進めてます。RECOREを用いた体幹強化と新たな体幹軟性装具の腰曲がりに対する効果を検証し、本学発の治療方法の実践・普及に取り組んでいく所存です。

今回の受賞にあたり、ご指導いただきました整形外科教授の出村諭先生をはじめ教室の先生方、リハビリ部のスタッフの皆さまに深謝致します。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう心よりお願い申し上げます。

第56回日本整形外科学会　骨・軟部腫瘍学会学術集会 Best Presentation Award 金賞・Best Poster Award 金賞受賞

三輪　真嗣
（平成15年卒業）
金沢大学附属病院整形外科

このたび、第56回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学会学術集会において、①研究課題「軟部肉腫術後感染の危険因子とスコアリングシステムの考案」でBest Presentation Award 金賞、②研究課題「液体窒素処理骨を用いた四肢再建術における処理骨生存の予後因子」でBest Poster Award 金賞を受賞いたしましたのでご報告申し上げます。

①　「軟部肉腫術後感染の危険因子とスコアリングシステムの考案」について

軟部肉腫の診療において、術後感染症は高い頻度で発生することが報告されており、感染を生じた場合はその治療のため化学療法や放射線療法などの予定治療が遅れ、予後を悪化させる可能性があります。本研究では、軟部肉腫の術後感染の危険因子を調査し、さらにノモグラムを作ることで個々の症例における感染の危険性を評価しました。結果としては、年齢、糖尿病、喫煙、手術時間、放射線療法が術後感染の危険因子としてあげられました。ノモグラムを作成して個々の症例における術後感染の危険性を評価したところ、検証コホートでは低リスク群の患者の2％、高リスク群の患者の16％で感染を認めました。これらの結果から、軟部肉腫患者における感染の危険因子を総合的に評価することで術後感染の予測が可能であり、高リスクの患者では徹底した感染予防対策が推奨されると考えました。

②　「液体窒素処理骨を用いた四肢再建術における処理骨生存の予後因子」について

液体窒素処理骨は骨腫瘍切除後の再建材料として金沢大学整形外科で開発し、現在は国内外のさまざまな施設で用いられています。液体窒素処理骨はシンプルな手技で骨組織の再生も期待できる有用な再建材料ですが、さまざまな理由により処理骨を抜去せざるを得ないことがあります。本研究では、液体窒素処理骨を抜去した患者の特徴を知ることで、液体窒素処理骨再建の良い適応や、適切な手技が分かるのではないかと考え、処理骨生存の予後因子について調査しました。結果として、BMI、腫瘍の発生部位、液体窒素処理方法（骨切りの方法）が処理骨生存の独立予後因子として挙げられ、適切な液体窒素処理方法を選択することで治療成績の向上が期待できると考えました。

これらの研究結果を高くご評価いただいたことを光栄に存じます。この研究の機会を与えていただきました土屋弘行名誉教授、山本憲男先生、また、統計解析についてご指導いただきました先端医療開発センターの遠山直志先生、宮城栄重先生に深く御礼申し上げます。この研究で得た経験を今後の診療・研究に生かすことができるよう、今後も頑張りたいと思います。

受　　賞

第10回JSURT（泌尿器画像診断・治療技術研究会）ポスター最優秀賞受賞

岩本　大旭
（平成22年卒業）
金沢大学大学院医学系研究科
集学的治療学泌尿器科

この度、令和5年8月4日から5日に開催されました第10回JSURT（泌尿器画像診断・治療技術研究会）にて「ソマトスタチン受容体シンチグラフィーと肝転移は神経内分泌前立腺癌の予後を予測する」という内容で発表し、ポスター最優秀賞を受賞致しましたので謹んでご報告申し上げます。

神経内分泌前立腺癌（NEPC）は非常に稀とされていますが、去勢抵抗性前立腺癌（CRPC）からNEPCに進行する症例が報告されております。NEPCは診断時点で70%以上の患者で遠隔転移を有し、非常に予後不良であります。確立された治療法はなく、小細胞肺癌に準じて白金製剤による化学療法が主に用いられますが、大規模な報告は少なく不明な点が多いため後方視的に検討致しました。本研究により、白金製剤はある程度奏功するものの奏功期間が短いこと、白金製剤を含まない化学療法はほぼ無効であることがわかりました。また、ソマトスタチン受容体シンチグラフィー（SRS）陰性症例と肝転移有り症例は有意に全生存期間が短いことを初めて報告致しました。SRSは神経内分泌腫瘍に対して施行されていますが、NEPCに対する報告はほとんど認めません。本研究で、SRSがNEPCにおける予後予測因子となりうる可能性を初めて示し、今後の治療につながる可能性を見出したことが評価されたと考えております。

最後に、今回の受賞にあたりご指導を賜りました金沢大学大学院医学系研究科集学的治療学泌尿器科の溝上敦教授、泉浩二准教授をはじめとする泌尿器科学教室の先生方やスタッフの皆さまに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

日本スポーツ整形外科学会2023ベスト口演賞受賞

浅井　一希
（平成25年卒業）
金沢大学附属病院整形外科

この度、“半腱様筋腱は骨端線閉鎖前後で変化する～移植腱に着目した若年者ACL再建術後成績不良因子の検討～”の研究に対して、日本スポーツ整形外科学会2023においてベスト口演賞を受賞させていただきましたので、謹んでご報告申し上げます。

前十字靭帯損傷は膝関節に発生するスポーツ損傷の中で重症とされており、靭帯再建術が必要となります。しかし、若年性では術後の成績不良が報告されておりますが原因は未だ不明とされています。本検討では、代表的な移植腱である半腱様筋腱の微小構造と力学的特性を大腿骨遠位の骨端線閉鎖前後で評価し、骨端線開存群の腱組織はコラーゲン線維径が細く力学的により伸びる組織であることを発見し報告致しました。この結果より、同じ移植腱であっても患者の年齢により質が異なっており、それが術後成績に影響を及ぼす可能性が示唆されました。本研究の成果が、若年者に対する靭帯再建術を検討する際の適切な移植腱の選択に繋がり若年患者の術後成績改善に寄与するものと考えております。名誉ある賞をいただき、今後ともスポーツ医学の発展に貢献できるよう研鑽を続けていきたいと存じます。

最後になりましたが、本研究に対しご指導、ご支援いただきました金沢大学整形外科土屋弘行名誉教授、中瀬順介先生、金沢大学医薬保健研究域医学系脳医科学専攻機能解剖学分野の尾崎紀之教授、石川達也先生、東海大学工学部材料科学科の葛巻徹教授、同教室の先生方に心より感謝申し上げます。

第32回日本がん転移学会学術集会若手ポスター賞受賞

神島　泰樹
（平成26年卒業）
金沢大学附属病院泌尿器科

この度、令和5年7月20日から21日に開催されました第32回日本がん転移学会学術集会にて「FGF-KRASシグナルは去勢抵抗性前立腺癌の進展に関与する」について発表し、若手ポスター賞を賜りましたので謹んでご報告申し上げます。

前立腺癌はアンドロゲン受容体（AR）シグナルに依存しており、ホルモン治療にてARを抑制することで癌の進行を抑制します。しかし、多くの患者がホルモン治療中に再燃し去勢抵抗性前立腺癌（CRPC）となることから、CRPCの進行にはAR以外のシグナルが関与していることが示唆されています。CRPCの中でも、PSAや神経内分泌癌マーカーが低値であるにも関わらず進行する治療抵抗性のDouble Negative CRPC（DNPC）の病態があり、治療に難渋します。特に最近は強力にARを抑制する新規ホルモン剤の使用が増えており、このようなARシグナル非依存性の前立腺癌が増えることが予想されます。

今回、CRPC患者のがんゲノムプロファイルから、DNPCの潜在的なドライバーとしてFGFおよびKRASを標的として研究を行いました。前立腺癌細胞株を用いた実験ではホルモン感受性前立腺癌ではFGF-KRASシグナルの影響はほぼありませんが、CRPCとなることでFGF-KRASシグナルが癌進展に関与していることが分かりました。また汎KRAS阻害剤の有効性も確認できました。この研究結果からはこれまでKRASは前立腺癌にあまり関連がないとされておりましたが、前立腺癌の終末期に見られるDNPCの病態に対してKRAS阻害剤が有効となる可能性が示唆されます。

今回の受賞にあたり、ご指導いただきました溝上敦教授、泉浩二准教授はじめ

泌尿器科学教室スタッフの皆さまに心より感謝申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

令和5年度
神野賞受賞

玉井　　翔
（平成26年卒業）
金沢大学附属病院脳神経外科

この度、2023年（第28回）日本脳腫瘍の外科学会におきまして、2022年Brain Structure and Function誌に掲載されました、原著論文Two different subcortical language networks supporting distinct Japanese orthographies: morphograms and phonogramsにて優秀論文賞である神野賞を拝受しましたので報告申し上げます。神野賞は、藤田学園保健衛生大学（現藤田医科大学）脳神経外科初代教授で、世界脳神経外科学会終身名誉会長であられた神野哲夫先生に因んだ大変名誉ある賞であり、誠に光栄に存じます。当論文は、形態素文字の漢字と表音文字である仮名より成り立つ、日本語音読の神経ネットワークにおいて漢字と仮名が互いに干渉しない異なる深部白質ネットワークを有することを、覚醒下手術の術中所見ならびに画像解析より証明致しました。本論文の執筆にあたり、長い期間ご指導いただきました中田光俊教授をはじめ教室の先生方にこの場をお借りし感謝申し上げます。今後も脳機能の解明、ひいては最良の医療提供に向け邁進してまいります。

十全同窓会の先生方におかれましては、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

令和5年度
金沢大学学長賞受賞

玉井　　翔
（平成26年卒業）
金沢大学附属病院脳神経外科

この度、学位取得および大学院博士課程修了に際しまして、令和5年度の金沢大学学長賞を拝受しましたのでご報告致します。

私は、「グリオーマ幹細胞に対する既存薬剤を用いた新規治療法の開発」をテーマに研究を行いました。膠芽腫（glioblastoma）は外科的摘出および術後放射線化学治療という現行治療をもってしても予後が1年半程度と未だ克服し得ない原発性悪性脳腫瘍です。今回、膠芽腫内に存在し、再発および治療抵抗性獲得に関わる腫瘍幹細胞であるグリオーマ幹細胞に対して治療効果を示す既存薬剤を当学がん進展制御研究所と共同で検出を行い、その薬理効果を検証致しました。この研究手法はドラッグリポジショニングと呼ばれ、早期臨床利用が可能である点から、新型コロナウイルス感染症パンデミック初期に有効薬剤の検出に大きく寄与するなど注目されています。

結果、抗真菌薬であるペンタミジン（pentamidine）がグリオーマ幹細胞に多面的な抗腫瘍効果を示すことを明らかにし、論文報告致しました。

今回の受賞にあたり、ご指導いただきました中田光俊教授をはじめ教室の先生方にこの場をお借りし感謝申し上げます。今後も脳神経外科疾患の治療・発展に向けて努めて参ります。

十全同窓会の先生方におかれましては、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

The 19th Asia Pacific Association of Surgical Tissue Banking Annual Meeting, Young Investigator Award受賞

淺野　陽平
（平成27年卒業）
金沢大学附属病院整形外科

この度、2023年8月に福岡で開催されたThe 19th Asia Pacific Association of Surgical Tissue Banking Annual Meetingにおいて、「Fibrous membrane formed around liquid nitrogen-treated bone promotes osteogenesis and revitalization of frozen bone: A rat study」という演題でYoung Investigator Awardを受賞することができましたので、謹んでご報告申し上げます。

本研究は、当研究室が悪性骨腫瘍に対して開発・臨床応用してきた液体窒素処理骨による生物学的再建法に関する基礎研究です。本術式に関しては、すでに当研究室から多数の臨床・基礎研究が発表や論文化されており、世界中で広く使用されています。その中でも本研究は、液体窒素処理骨の周囲に形成される膜組織に着目し、処理骨の骨再生と骨形成への関与を解明することを目的に立案しました。膜組織には種々の骨・血管形成に関連する因子が高発現しており、膜内の線維芽細胞と新生血管が処理骨の表面から骨内に侵入し、血管形成を促進している所見を確認しました。また、処理骨と正常骨の境界部分では、膜組織から分化した軟骨細胞による軟骨内骨化も認めました。これらの所見は、いずれも処理骨の骨再生と骨形成の初期段階において膜組織が関与していることを示唆する重要な所見であり、本研究によりはじめて明らかになりました。今後は、再建時における膜組織の応用方法に関してさらなる研究を進める予定であり、本術式の臨床成績の向上に寄与できればと考えております。

今回の受賞にあたりご指導をいただきました土屋弘行名誉教授、山本憲男先生をはじめ教室の先生方に深謝致します。今回の経験を今後の臨床・研究活動にいかせるよう、より一層精進致します。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

受　　賞

第11回 Japan Association of Spine surgeons with Ambition（JASA）Best Presenter Award受賞

小林　源哉
（平成27年卒業）
金沢大学整形外科

この度令和5年8月5日から6日にかけて開催された第11回Japan Association of Spine surgeons with Ambition（JASA）に参加致しました。「凍結療法を併用した転移性脊椎腫瘍に対する新たな手術に向けた基礎的研究」の発表に対しBest Presenter Awardを受賞致しましたので、謹んでご報告申し上げます。

近年、がん治療の進歩によりがん患者の生命予後が延長し、脊椎転移の有病率も増加しています。我々の研究室では腫瘍を凍結死させることで腫瘍制御を図る凍結療法（cryoablation）に注目し、凍結療法を脊椎転移治療に応用するための基礎研究を日々行っています。

凍結療法は腎がん等の放射線治療に抵抗性の腫瘍に対しても効果が確認されております。さらに凍結により抗原変性をおこさず腫瘍を死滅させることで“がん免疫”を賦活化し、全身的な免疫治療につながる可能性のある治療でもあります。本会では脊椎転移に対する凍結療法がもつがん免疫賦活効果、神経を内包する脊椎において許容される凍結強度の検証結果について報告しました。

本学会は50歳以下の「Ambition」を持った脊椎外科医を対象としたユニークな会です。発表後には会場に準備されたマイクに質問者が長蛇の列を作り、白熱した議論が交わされます。このような熱量のある学会にてこの度Awardを頂けたことを心より嬉しく思います。

最後に本研究においてご指導いただきました土屋弘行名誉教授、出村諭教授、加藤仁志先生をはじめ、整形外科学教室の先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。十全同窓会の先生におかれましては今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

第33回日本整形外科超音波学会最優秀論文賞受賞

金山　智之
（平成28年卒業）
KKR北陸病院整形外科

この度、「超音波診断装置を用いたramp病変の経時的評価」と表した論文が、第33回日本整形外科超音波学会最優秀論文賞に選出されましたのでご報告させていただきます。

私自身昨年の日本関節病学会優秀論文賞に引き続き2年連続でこのような栄誉な賞をいただくことができ、非常に光栄に感じております。決して自分一人の力では成し遂げることはできなかったものでありますので、諸先輩方が積み上げてこられた功績の成果であることを忘れず、今後も精進してまいります。

今回報告した内容は、スポーツ障害として頻度の高い前十字靭帯損傷における合併症の一つとして近年注目されているramp病変に関する研究になります。ramp病変は適切に治療しないと膝関節不安定性の残存を生じるため、その診断と治療が重要です。しかし、一般的に用いられているMRI検査では感度71％と診断が難しいことが課題です。そこで我々のグループでは超音波を用いた診断方法を検討し、術前診断の一助となることを報告してきました。今回の研究では超音波検査により、ramp病変を経時的に評価することを目的とし、不安定なramp病変は超音波検査により描出が可能であるものの、安定したramp病変は超音波検査では描出不良であることを明らかにしました。

末筆ではございますが、今回の受賞にあたりご指導をいただきました土屋弘行名誉教授、中瀬順介助教をはじめ、金沢大学整形外科同門の先生方やスタッフの皆さまにこの場を借りて厚く御礼申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

第58回中部日本小児科学会優秀演題賞受賞

坂井　勇太
（平成28年卒業）
金沢大学附属病院小児科

この度、第58回中部日本小児科学会において「胸腺原発異所性ACTH産生腫瘍により重篤なCushing症候群を来し集学的治療を要した7歳男児例」の報告で優秀演題賞を賜りましたので、謹んでご報告申し上げます。

Cushing症候群の主な原因は、Cushing病、異所性ACTH産生腫瘍、副腎腺腫/癌などの腫瘍性疾患であり、多くの場合、外科的切除を必要とします。特に、過剰なコルチゾール分泌が致死的合併症をもたらす場合には、手術までの待機期間に迅速な内分泌学的介入が必要となります。本症例は、胸腺原発異所性ACTH産生腫瘍（胸腺異型カルチノイド）により低カリウム血症や尿路結石に伴う腎後性腎障害など重篤な症状を呈しました。小児例でのCushing症候群は稀であり、本症例における周術期の内分泌学的管理が貴重な教訓となりましたので、報告させていただきました。

また、胸腺異型カルチノイドは非常に予後不良な疾患であり、当該症例には外科的切除、放射線照射、化学療法を施行しました。治療終了から2年が経過しますが、患児に再発はなく元気に過ごされています。

治療に際しては、小児外科、呼吸器外科、放射線治療科、病理部、小児科内分泌グループなど、科の垣根を超えて十全同窓会の先生方にご尽力いただき、最善の医療を提供することができました。また、発表に当たり、小児科教授の和田泰三先生、チーフの伊川泰広先生をはじめとする小児科血液腫瘍グループのメンバー、そして小児科学教室の先生方にたくさんのご指導をいただきました。この場をお借りし心より感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、お願い申し上げます。

第103回日本脳神経外科学会 中部支部学術集会 優秀論文賞受賞

森田　一矢
（令和3年卒業）
石川県立中央病院脳神経外科

この度、第103回日本脳神経外科学会中部支部学術集会 優秀論文賞を、「乳癌の頭蓋骨転移に関する臨床病理学的考察：脳転移との比較」の演題にて受賞致しましたことを謹んでご報告させていただきます。

脳神経外科診療において乳癌の頭蓋骨転移例および脳転移例にしばしば遭遇します。転移性乳癌の特徴として他の癌と比較し遅発性に生じることが知られており、原発巣治療後5-10年経過した後に転移性乳癌が発見されることもありますが、乳癌における頭蓋骨転移と脳転移の臨床的および分子病理学的な違いは十分解明されていませんでした。今回我々は、当施設で摘出術、病理解析を行った乳癌の頭蓋骨、脳転移例を抽出し、再発までの期間、エストロゲン受容体（ER）、プロゲステロン受容体（PR）、ヒト上皮成長因子受容体2型（HER2）の発現、Ki-67 indexを解析しました。結果、頭蓋骨転移例はER/PR陽性、HER2陰性、長期経過を経て発症するのに対し、脳転移例はER/PR陰性、HER2陽性、早期発症の傾向にあることがわかりました。また、Ki-67 indexで示される細胞増殖能は脳転移例の方が有意に高いことが示唆されました。したがって、乳癌の頭蓋骨、脳転移例は臨床的、分子学的に異なる可能性が示唆されました。また、本研究成果は日本脳神経外科コングレス機関誌「脳神経外科ジャーナル」に上梓される予定です。

受賞に際して、熱心にご指導をいただきました中田光俊教授、笹川泰生先生および脳神経外科教室の皆さまに心より感謝申し上げます。また寄稿の機会を賜りました十全同窓会の先生方に深く感謝申し上げますとともに、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

令和５年度 金沢大学学長賞受賞

山室　裕紀
（令和5年度大学院修了）
金沢大学附属病院整形外科

この度、令和５年度の金沢大学学長賞を受賞しましたのでご報告させていただきます。

整形外科領域において人工関節手術は、良好な成績より世界的に増加しています。しかし、未だ解決されていない合併症に人工関節周囲感染があります。この人工関節周囲感染は、バイオフィルム形成を特徴とし、長期抗菌薬使用による薬剤耐性化やインプラントを温存しての感染沈静化は困難であり、繰り返しの手術が必要となります。そのため、非抗菌的アプローチかつインプラントを温存した状態で感染を鎮静化させる治療開発が課題と言えます。そこで、脂肪由来幹細胞の抗菌ペプチド分泌能と免疫応答の調整作用に着目し、治療に難渋する人工関節周囲感染の新たな治療法を検討しました。その結果、抗菌薬単独より抗菌薬と脂肪由来幹細胞を併用投与することで人工関節周囲感染モデルラットの体重減少の抑制、インプラント周囲の細菌数や膿瘍の減少、骨密度減少の抑制を示し、強い抗菌効果を認めました。さらに、感染局所の抗菌ペプチド発現増加、炎症性サイトカイン発現低下との関連が示唆されました。これらの研究成果の結果として、名誉ある学長賞を受賞させていただき、大変光栄に存じます。今回の研究活動で得られた経験を、研究や臨床に役立てるべく、継続的に努力を重ねていく所存です。

今回の受賞にあたり、ご指導いただきました整形外科学の土屋弘行名誉教授、加畑多文先生をはじめ同教室の先生方、国際感染症制御学の所正治教授にこの場を借りて深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

東日本研究医養成コンソーシアム 第13回夏のリトリート口頭発表 優秀賞受賞

新井　雄大
（MRT・医学類5年）

この度、東日本研究医養成コンソーシアム 第13回「夏のリトリート」におきまして、「ボツリヌス菌の感染防御に寄与するヒト腸内細菌の分離・同定」について発表し、口頭発表部門優秀賞を受賞致しましたので謹んでご報告致します。

ボツリヌス菌は健常な成人には感染しませんが、抗生剤を大量投与された成人では腸管感染する事例があることや、無菌または抗生剤を投与したマウスは成獣であっても腸管感染が成立することが報告されています。これらの知見から、成人の腸内細菌叢がボツリヌス菌への感染耐性に寄与していると考えられますが、具体的な腸内細菌の種類は明らかになっていません。これまでの研究で、健常成人の糞便を抗生物質等で処理した上で無菌マウスに移植することで、感染耐性を付与する腸内細菌を特定の細菌群に限定しました。そこで、本研究ではこの中から感染防御効果を持つヒト腸内細菌の分離・同定することを目的としました。まず、上述の菌叢移植マウスの糞便から、複数の培養条件を用いることで189の細菌株を単離し、遺伝子配列の相同性に基づき13種に分類しました。次に、これらを混合して無菌マウスに移植し、ボツリヌス菌感染感受性を解析したところ、完全な感染耐性が付与されました。以上の結果から、ボツリヌス菌感染耐性を付与するヒト腸内細菌を絞り込むことに成功しました。今後、さらなる責任細菌の絞り込みや分子機構の解明を行うことで、乳児ボツリヌス症発症機構の解明と新規治療法の開発に繋げていきたいと考えています。

最後に、本研究におきましてご指導を賜りました藤永由佳子教授、小林伸英助教をはじめとする細菌学教室の皆様に心より御礼申し上げます。

学 会 報 告 等

第21回日本Awake Surgery学会

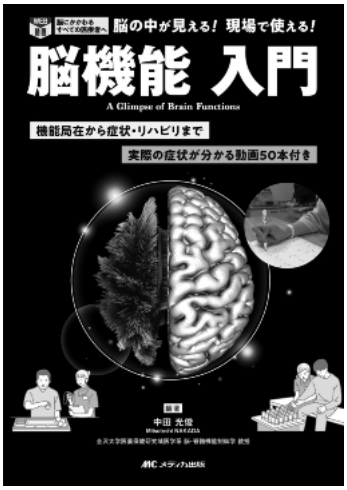
会期／令和5年7月15日（土） 場所／金沢市アートホール

覚醒下手術は開頭手術中に患者の意識を覚醒させ、検査を行いながら脳病変を処置する手術です。腫瘍摘出率を向上させ、かつ慢性期の神経学的後遺症を回避できる優れた手術法です。この手術法が日本で保険収載されたのは2014年で、施行施設は全国に広がり、適応が拡大しています。この手術法を議論する日本Awake Surgery学会は単日開催の全国学会です。5月にはコロナが第5類感染症に移行し、完全現地開催とすることもできましたが、参加者の利便性を考えハイブリッド開催としました。この学会を担当するにあたり、主題を「Awake未来知」と設定して、学会初となる2つの自主企画を組みました。一つは学会前日午後に金沢大学解剖棟で行う白質解剖ワークショップです。ワークショップには全国から36名集まり、脳白質神経線維の実際の走行を観察していただきました。脳を理解する貴重な経験であったと好評でした。もう一つの企画は、覚醒下手術に役立つ本の発刊です。「脳機能 入門」を、2年がかりで作成し、学会に合わせて発刊しました。

講演者として覚醒下手術の第一人者であるモンペリエ大学のDuffau教授を招き、前日夕には十全講堂で医学部学生・大学院生・全学部教員向けの脳の講義を賜りました。学会当日は専門家向けの覚醒下手術と脳科学についてご講演いただきました。また、脳科学研究でご高名な富山大学の井ノ口馨 教授に睡眠と記憶の最先端研究の内容をお話しいただきました。2日間で300名以上の先生方にご参加いただき、シンポジウム、一般演題でも多くの質疑応答があり、おおいに盛り上がりました。

今回、白質解剖ワークショップを実現するために、ご献体を医師教育目的に解剖することを検討する学内委員会が設置されるなど、機能解剖学分野の尾崎紀之教授と法医学の塚正彦教授をはじめ、多くの先生方にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

（学会長　中田　光俊：記）



第36回日本冠疾患学会

会期／令和5年11月24日（金）～11月25日（土）　場所／ホテル日航金沢

第36回日本冠疾患学会学術集会が令和5年11月24日から25日にかけて金沢で開催され、現地での参加形式で629人が参加し、成功裏に終了しました。この学会は1994年に、冠動脈疾患診療における外科と内科のさらなる連携の重要性を啓発するため発足し、外科系と内科系の2人の会長を採用しています。学術集会では、外科と内科の専門家が協力して、真にpatient-orientedの精神で冠疾患の医学と医療を学び合うというユニークなコンセプトが取り入れられています。第36回日本冠疾患学会学術集会は、外科系会長を拝命した金沢大学心臓血管外科教室の竹村博文教授、内科系会長を拝命した金沢大学循環器内科教室の高村雅之教授を中心に、心臓血管外科教室と金沢大学循環器内科が一丸となって、学会の運営に取り組みました。

学会のテーマは「CROSSOVER―平行線から交差点へ―」とし、冠疾患に関する基本的および臨床的研究の進歩と普及を促進し、これを通じて診断や治療の向上を目指すための議論が2日間にわたり行われました。学会には国内外の著名な専門家が招かれ、最新の研究成果や治療法に関する講演が行われました。

外科の海外招請講演では、オックスフォード大学心臓血管外科のDavid Taggart教授が、冠動脈血行再建術の予後評価や治療成績に関するエビデンスから最新の外科的冠動脈血行再建術のトレンドについて講演しました。内科の海外招請講演では、スタンフォード大学循環器内科教授である本多康浩先生が、冠動脈インターベンションデバイスの歴史からAIを活用したデジタルヘルス医療デバイスの開発やビッグデータを使った臨床研究、そして将来の循環器医療の展望について講演しました。

外科系と内科系の区別を超えた合同シンポジウムでは、将来の冠動脈疾患診療の進むべき方向に焦点を当てたプログラムが展開され、外科と内科の視点を超えて知識を共有しました。急性心筋梗塞診療における外科内科の協働やハートチーム医療の進展にも焦点が当てられ、多職種連携による包括的な診療・ケアや急性期の機械的補助循環の管理、緊急対応の知識についての教育講演が行われました。

金沢大学循環器内科および心臓血管外科が主催した本学術集会では、領域を超えた学術的な刺激と交流の場となりました。外科系と内科系の協力と交流を重視し、冠動脈診療に焦点を当てた本学術集会を通じて、現代のチーム医療や多職種連携に応える形で進化し、発展していくことで、今後時代に即した充実した学術集会となっていくであろうと実感しました。

本学会の開催にあたり、国内外の循環器内科、心臓血管外科の先生方、コメディカルの方々だけでなく、和田隆志学長、蒲田敏文院長をはじめ、多大なるご支援をいただいた皆さまに深く感謝申し上げます。

（竹村　博文、高村　雅之：記）

学 会 報 告 等

第68回日本生殖医学会学術講演会・総会

日時／令和5年11月9日（木）～10日（金）　場所／石川県立音楽堂・ホテル日航金沢・金沢市アートホール

第68回日本生殖医学会学術講演会・総会は、2023（令和5）年11月9日（木）～10日（金）の2日間、石川県立音楽堂・ホテル日航金沢・金沢市アートホールで開催致しました。開催形式は、現地開催および会期後指定セッションのオンデマンド配信としました。お陰様で参加者数は合計2954名（現地参加者2061名）と例年を上回るご参加を賜りました。第68回日本生殖医学会学術講演会では、会長講演・海外招請講演2演題・特別講演2演題・教育講演7演題・シンポジウム9セッション・第26回男性不妊フォーラム・韓国生殖医学会とのジョイントセッションを企画し、一般演題（口演）は58セッション269演題・一般演題（ポスター）は268演題のご応募をいただきました。いずれのご発表におきましても、有意義かつ活発な討議がなされましたことに心より御礼申し上げます。

本学術講演会は、産婦人科医のみならず生殖医学に関わる多職種（胚培養士・看護師・生殖生物学者など）が参加し、毎年、臨床から基礎に至る幅広い分野のメンバーにおける交流の場として開催されています。今回の開催におきましては、「次世代へ紡ぐ生殖医学」をテーマに、臨床から基礎分野に至る幅広い最新知見についてご発表いただき、意見交換を行いました。海外招請講演では米国Northwestern大学のSerdar E Bulun教授をお招きし、「子宮筋腫・内膜症・腺筋症の病態解明」をテーマに遺伝学的要因・環境因子など多岐にわたる最新知見についてご講演いただきました。また、スウェーデンのGothenburg大学からは子宮移植の分野で世界をリードするMats Brännström教授にお越しいただき、これまでの歴史と今後の展望についてご講演いただきました。さらに特別講演では、生殖免疫学の立場からみた哺乳類の着床、妊娠成立機構について、富山大学の齋藤滋学長にご講演いただき、また、脱落膜化の分子メカニズムに関して、山口大学の杉野法広病院長にご講演いただきました。また、シンポジウムでは、関連学会とのコラボレーションを企画し、胎盤形成と妊娠成立機構、中枢生殖内分泌学の最新知見、配偶子・胚の代謝と胚発生、ヒトの生殖と免疫、母体環境と先天異常、卵巣予備能低下に関する今後の展開について、各テーマでご発表いただき、活発なご討議をいただきました。本学術講演会では、基礎から臨床、さらには職種を越えたより高い視点から、生殖医学について議論できる機会を提供できたのではないかと存じております。

第68回日本生殖医学会学術講演会・総会の開催に際しましては、日本生殖医学会・学会運営業者と連携を図りながら金沢大学産科婦人科学教室が一丸となって準備して参りました。今回、本学術講演会が大きなトラブルもなく無事終了できましたことに対し、我々教室員一同安堵の胸をなでおろすとともに、ご参加・ご支援いただきました十全同窓会の皆様方に心より御礼申し上げます。

（金沢大学医薬保健研究域医学系医学類
生殖・発達医学領域　産科婦人科学教授
藤原　　浩：記）

異分野融合、学術と芸術の講演会

日時／令和5年11月23日（祝日）　場所／金沢大学十全講堂

東京藝術大学長の日比野克彦先生を招き、「医学と芸術の融合」をテーマにした学術講演会とパネルディスカッションを行いましたので報告いたします。本講演会の発案者である金沢大学学長の和田隆志先生の開会の挨拶ではじまり、第1部の特別講演は、日比野克彦先生が、「アートの社会的役割」と題する講演をされました。日比野先生は筆者と同郷の岐阜市の出身で、岐阜の高校の同級生です。日比野先生は館内の展示室だけでなく、さまざまな地域の人々と共同制作を行いながら、受取り手の感受する力に焦点を当てたアートプロジェクトを展開し、社会で芸術が機能する仕組みを創出されたことをお話しされました。

第2部のパネルディスカッションは「アートとサイエンスの融合」と題して、レオナルド・ダ・ヴィンチもびっくり、芸術家と医学者との対話という企画を行いました。筆者が司会をして、本学からは医薬保健研究域長・神経解剖学教授の堀修先生、機能解剖学教授の尾崎紀之先生、精神行動科学教授の菊知充先生、他大学からのゲストで山口大学医学部長・神経解剖学教授の篠田晃先生（日比野先生と筆者の高校の同級生）、川崎医科大学解剖学教授の樋田一徳先生の５名の先生にショートプレゼンテーションをしていただき、日比野先生を含めてディスカッションを行いました。アートとサイエンスは対極にあるようで、ルネッサンス時代から歴史的にも深くかかわりがあり、その融合によって新しい研究分野が創出される可能性が示唆された実に興味深い討論会でした。

最後に閉会の言葉として、金沢大学理事・副学長の大竹茂樹先生が本講演会を総括されて終了しました。多くの皆さまに対面でご参加いただき、感謝申し上げます。

（金沢大学医薬保健研究域・学域
医学系長・医学類長・眼科学教授
杉山　和久：記）

学 会 報 告 等

第66回日本甲状腺学会学術集会

会期／令和5年12月7日（木）～12月9日（土）　場所／金沢市文化ホール

令和5年12月7日から9日にかけて、第66回日本甲状腺学会学術集会（大会長：絹谷清剛）が金沢で開催されました。約300演題の一般発表が行われ、約1500名の参加があり（例年と比較して20-30%増加）、大会は成功裏に終了しました。学会のテーマは「甲状腺診療の極みへ」とし、甲状腺診療に関連する討論が活発に行われました。特に今回は核医学が主催する集会であり、シンポジウムや教育講演では核医学の立場から甲状腺に焦点を当て、バセドウ病や甲状腺癌に対する治療に重点を置きました。

2023年11月には、甲状腺癌に対する新規分子標的薬が承認され、これに関連して分子標的薬の使用タイミングについての意見交換が行われました。さらに、特別講演では、大阪大学の渡部直史先生が登壇し、最近注目されている核医学アルファ線治療について講演されました。医師主導治験で実施されている難治性甲状腺癌に対するアルファ線治療は世界で注目されており、好評を博しました。

会長招宴では、中国から留学中の張雪先生が、プロの中国琵琶奏者として、高田亜紀先生のピアノ演奏と共演しました。また、学会中は、学会場の和室で当科外来受付事務の大江さんに呈茶のおもてなしをしていただきました。学術面以外でも、金沢での開催を楽しんでいただけたと確信しております。なお、本学会の開催に際し、金沢大学や金沢医科大学関連の甲状腺診療に携わる多くの先生方にも多大なご協力とご支援を賜りましたこと、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

（第66回日本甲状腺学会学術集会
プログラム委員長　若林　大志：記）

金沢から世界へ発信

研究成果を通じて北陸を世界一優れた脳神経外科医療圏にする

金沢大学医学系　脳・脊髄機能制御学
中田　光俊
（平成6年卒業）

脳の臨床外科医学はまだ日が浅く日進月歩であり、研究によりまだまだ医療が変化する領域であると考えています。当教室では原則全員が大学院に入学し、一定期間研究に専念し学位を取得します。また、常に海外からの留学生が3名以上在籍し、教室員と切磋琢磨しています。研究内容は、臨床の現場から発生する治療上の重要な課題のみならず、その背景となる神経科学を対象としています。さらに他領域との共同研究を積極的に進めています。教室のモットーは「一緒に働ける縁を大切にして、100年後も輝ける仕事をしよう」です。「100年後も輝ける仕事」とは、研究による普遍的な定理の発見と新たな治療概念の確立を指します。

脳腫瘍の基礎・臨床研究と脳科学研究

悪性脳腫瘍の早期発見や病勢診断のバイオマーカーは同定されていません。教室では、これまでに複数の血液バイオマーカー候補を同定し、国内多施設共同研究が進行中です。本診断法の社会実装を目指しています。治療については、脳腫瘍細胞に対して抗腫瘍効果を有する既存薬を探索しています。数種類の候補薬剤の抽出に成功し、臨床応用を計画しています。また、難治の原因である「正常脳への浸潤」に関わる微小環境と分子メカニズムに注目し、基礎研究を進めています。

手術では、脳機能の温存を可能にする覚醒下手術を行っています。同時に、覚醒状態で脳の直接電気刺激による一時的な神経機能脱落を検討することにより、脳神経回路を明らかにしています。これまでに知られていなかったヒト高次脳機能の脳局在を同定し、これを温存する次世代型の覚醒下手術を確立しました。現在、多くの施設で行われるようになっています。また、脳機能の局在は、緩徐進行性病変の侵襲により移動しうることを示しました。従来摘出困難と考えられていた機能野に局在する腫瘍においても、脳の可塑性・機能再構築により安全に摘出可能であることを提言しました。

脳血管障害に対する治療法開発

血管内手術の進歩が著しく、脳動脈瘤治療は従来からの開頭クリッピング手術と比較して、低侵襲な血管内手術を行うことが多くなりました。ただ後者では、10%以上に再発を認めることが問題となっています。教室では数値流体力学的解析によって、再発しやすい脳動脈瘤の特徴を明らかにしました。動脈瘤内への効果的なコイルの充填法を編み出し、再発率を劇的に改善させることに成功しています。また、治療困難な脳動脈瘤に対しては、血管内手術と開頭クリッピング術を同時に施行するハイブリッド手術法を開発しています。くも膜下出血の基礎研究は、長期にわたり神経解剖学 堀 修 教授と共同研究を進め、得られた知見は臨床研究の基盤となっています。

頚動脈狭窄症に対するステント留置術が一般的になり、従来の頚動脈内膜剥離術を凌駕しています。教室では、ステントの高リスク症例を内膜病変の画像解析から抽出し、治療選択を明確にすることで合併症の少ない治療を実践しています。

急性期脳梗塞に対する血栓回収術の有効性が明らかとなり、全国的に脳卒中医療の整備が進んでいます。石川県はこの治療体制について先進県で、地域モデルを提唱しました。

脳深部病変に対する挑戦と機器開発

内視鏡が導入され、水頭症手術や脳内血腫の除去術、または経鼻手術による下垂体腫瘍の摘出など確立した手術手技となっています。これらの病変のみならず、これまでは到達できなかった脳深部の病変に対しても、神経内視鏡を応用しています。また、教室では下垂体腺腫における頭痛発生メカニズムを明らかにし、またMRIによる術後神経麻痺や尿崩症の発症予測法を報告しました。一方で、理工系との共同研究により、手術機器開発も行っています。近い将来、脳神経外科領域においても他の外科に追随し、ロボット手術が適応されると思われます。より細径かつ繊細な手術器具を要するため、医工連携での開発を目指しています。

以上多岐にわたる、研究内容を紹介いたしました。今後も脳の神秘に迫り、脳神経外科医療に還元できる研究を行い、世界で活躍できる次世代教育に注力いたします。これからも同窓会の厚いご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

十全学術行脚　第36回｜金沢大学融合研究域・国際基幹教育院｜

金沢大学融合研究域・国際基幹教育院

金沢大学は、世界で活躍する「金沢大学ブランド」人材育成のため、独自の教育方針である金沢大学＜グローバル＞スタンダード（KUGS）を定めています。KUGSは「自己の立ち位置を知る」、「自己を知り、自己を鍛える」、「考え・価値観を表現する」、「世界とつながる」、「未来の課題に取り組む」および「新しい世界を生きる」の6つの教育目標から構成されています。国際基幹教育院は、このKUGSに基づく基幹教育を強固に推進することによって、本学の教育全体の高度化と国際化を牽引することを目的として2016年度に創設された新しい部局です。基幹教育とは、学士課程および大学院課程それぞれの教育の基盤をなす教養的教育です。

国際基幹教育院は、文系および理系の一括入試で入学した総合教育部に所属する（進学する学類を決めていない）学生の教育も担っています。研究室は角間キャンパスの北地区総合教育１号館にあり、十全同窓会員２名が所属しています。

融合研究域は、全学から自薦・他薦を問わず、異分野に挑戦することを厭わない教員を公募し、2020年度に新設されました。異分野融合教育とアントレプレナーシップ教育を実施し、「超スマート社会Society 5.0」の実現による経済発展と社会課題解決を志し、国際的な展開力を持ち、これからの社会変革（Innovation）を先導する人材の養成を教育・研究の目標としています。2021年度に融合学域先導学類（入学定員55名）、2022年度に観光デザイン学類（入学定員15名）、2023年度にスマート創成科学類（入学定員20名）が発足しました。2024年度には定員の純増が認められ、3学類共に入学定員が55名となります。研究室は角間キャンパスの南地区自然科学2号館にあり、十全同窓会員3名が所属しています。

（大竹　茂樹：記）

融合研究域

国際基幹教育院

1. 大竹　茂樹　理事・副学長

（昭和52年卒業）

私は本学を卒業後、第三内科において服部絢一教授、松田保教授のご指導を受け、1998年に医学部保健学科（当時）教授に就任、2010年保健学系長、保健学類長、2014年共通教育機構長、2016年に新設された国際基幹教育院の初代院長・副学長に就任しました。2017年に理事・副学長を拝命し、今日に至っています。2020年に新設された融合研究域長に就任し、2021年からは融合学域長も兼任しています。現在の理事としての職務は、総括・大学改革・附属病院に加えて、学友会・金沢大学基金、危機管理と法務・知財も担当しています。

金沢大学では、文理医融合研究の推進が大きなテーマとされ、医薬保健研究域と理工研究域の共同シンポジウムの開催などを通じて、融合研究の活性化が図られています。融合研究域が全学の模範となることを願っています。

附属病院では、第2中央診療棟の完成が目前に迫り、2月から外来化学療法センターを先頭に順次使用を開始する予定です。3月17日（日）には竣工記念式典も計画しています。

近年同窓会への加入率が低下し、同窓会名簿の作成も個人情報の壁が高くなって来ました。大学にとって学友会の発展は何より重要なことです。十全同窓会の皆さまの変わらぬご指導とご支援をお願い申し上げます。

2. 米田　　隆　学長補佐、教授

（平成２年卒業）

融合研究域融合科学系

私は本学卒業以来、竹田亮祐名誉教授（旧第二内科）が始められた副腎の臨床・研究を継続しています。臨床的アンメットニーズに応えるべく、医と理工の融合研究で、ナノテクノロジーを用いた迅速コルチゾール測定キットを開発、国内外の特許取得、海外薬事承認ならびに企業との産学連携、診療ガイドライン推奨など社会実装を実現しました。また、内分泌代謝疾患診療の特性から、IoTを用いた遠隔診療にいち早く注目し、2008 年からIoT利活用研究に取り組み、最近は、AI仮想空間技術を加えた新たなヘルスケアシステム構築（医療DX）を目指しています。

融合学域では、若い学生とともに、世の中のニーズを背景に、未来から現在を見るバックキャスト思考を行い、学生と雑談の中でお互いに学びあい（雑談の力）、それぞれの得意分野に加え、法律・倫理、経済などの幅広い知識を加え、マーケティング活動やアイデア創出を実践し（デザイン思考）、自分の叶えたい夢や社会貢献の実現を目指し、スタートアップや資金調達のための政府の研究事業申請、特許取得など行っています（文理医融合）。2023年には学生たちがヘルスケア領域のベンチャー企業も設立したところです。今後ともより一層精進してまいりますので、十全同窓会の先生方におかれましてはご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

3. 滝野　隆久　教授

（平成6年度大学院修了）

国際基幹教育院GS教育系

私は1990年に徳島大学歯学部を卒業後、金沢大学医学部歯科口腔外科に入局致しました。山本悦秀教授のご教示で口腔がん研究に興味を抱き、1991年に金沢大学大学院医学系研究科に入学致しました。大学院では、清木元治教授が主宰されていました金沢大学がん研究所ウイルス部でがん細胞浸潤における細胞外マトリックス分解酵素の役割に着目した研究を始めました。幸いにも、がん浸潤・転移の鍵となる分子として注目されている細胞外マトリックス分解酵素、膜型マトリックスメタロプロテアーゼ（MT1-およびMT3-MMP）の発見に携わることができました。学位修得後は、日本学術振興会特別研究員を経て、1997年から米国保健衛生研究所（NIH）のKenneth M. Yamada博士のもとに留学し、細胞外マトリックス/インテグリンを介した細胞運動誘導シグナル伝達経路の解析を行いました。1999年からは佐藤博教授が主宰されていました金沢大学がん進展制御研究所細胞機能統御研究分野に着任し、細胞外マトリックス分解による細胞運動誘導シグナル伝達の研究を行ってまいりました。

2016年から大竹茂樹院長が統率する国際基幹教育院に異動し、全学生対象のGS科目「細胞・分子生物学」を担当しております。講義では、「がん」という疾患を理解するために必要な最新の細胞・分子生物学的知識を学生に提供できるように努めています。研究面では、がん進展制御研究所の温かいご支援のもとで、がん細胞浸潤の分子メカニズムの解明に引き続き取り組んでおります。

最後になりますが、金沢大学医学部十全同窓会の皆さまにおかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう何とぞよろしくお願い申し上げます。

十全学術行脚

4. 髙松　博幸　教授

（平成12年卒業）

融合研究域融合科学系

私は本学を卒業後、直ちに本学内科学第三の大学院に入学し、中尾眞二教授のご指導の下、本学および関連病院にて、血液内科学の臨床・研究・教育に取り組んでまいりました。その過程で、Bedside-to-Bench-to-Bedsideのコンセプトに基づき、米国スタートアップ企業等との共同研究を行い、新規診断法や診断薬の臨床実装に従事し、ライフサイエンス・イノベーションによる社会変革を目指した研究に尽力してまいりました。

令和3年度から現所属である融合科学系に移り、PET/CTやMRI画像、骨髄・末梢血液像の人工知能を用いた解析、大規模臨床データのデータサイエンスによる解析を理工学系専門家や台湾のスタートアップ企業と共同研究として行い、社会実装・起業家育成を進めております。令和5年度からはサバティカル研修を活用し、カリフォルニア大学サンフランシスコ校で研究、教育を行っております。シリコンバレーを含むベイエリアでは世界トップクラスのライフサイエンス、IT等の最先端技術がハイスピードで研究・開発、社会実装されております。この経験を本学での研究、学生や若手医師の教育に活用していきたいと思っております。金沢大学十全同窓会の先生方には引き続きご指導、ご鞭撻を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

5. 唐島　成宙　准教授

（平成16年卒業）

国際基幹教育院GS教育系

金沢大学附属病院卒後研修センターでの研修を修了し、2006年から山岸正和教授と武田仁勇特任教授に師事し、内分泌代謝内科医としてのキャリアを積み重ねてまいりました。2017年からは、米田隆先生の紹介で知り合った他学類の学生と共に研究を行っていたところ、山崎光悦前金沢大学学長から融合学域の設置準備委員会の一員に指名されました。当時の私は附属病院の内分泌代謝内科医員でしかなく、他の委員会メンバーは他学域/学類の長や著名な教員ばかりであることを考えると、私の選出は異例のことでした。2020年には国際基幹教育院GS教育系に異動し、2021年からは融合学域先導学類の準専任教員として、多くの講義を担当しています。

現在も私の授業をきっかけに医療分野の研究に興味を持ってくれた学生と研究を進めています。学生が筆頭著者または共著者として掲載された論文は、2023年10月現在で8本になりました。特に当時経済学類1年生だった学生と開始した研究は、その翌年に日本内分泌学会の公式雑誌であるEndocrine Journalに掲載されました。経済学類の学生が医学雑誌で筆頭著者になることはめったにない出来事です。コロナ禍の影響もありほぼオンラインが主体の研究指導でしたが、教員の熱意は学生に伝わることを確認でき私にとっても大きな自信と財産となりました。

また、従来の授業教材を発展させるため、学術メディア創成センターや理工学域の教員、企業の協力を得て、VRやAI ChatBotなどを利用した革新的な教材の開発に取り組んでいます。日本国民は、他国と比べてヘルスリテラシーが低いと報告されています。これらの高等教育教育手法の発展が患者や一般の人々に普及し、正しい医学知識が彼らの健康を守り増進するために貢献することを目指しています。

今後も、より一層の努力と情熱を注ぎ込み、十全同窓会の先生方からのご指導とご鞭撻をいただきながら、医学と教育の分野での成長を続けてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

6. 野村　章洋　准教授

（平成18年卒業）

融合研究域融合科学系

金沢大学を卒業後、臨床研修・後期内科研修は聖路加国際病院で4年間、その後循環器内科専門研修として北九州市の小倉記念病院にて3年間の研鑽を積み、卒後8年目で金沢大学に戻り大学院に入学致しました。大学院在籍中にアメリカ・ボストンのマサチューセッツ総合病院へ留学し、バイオインフォマティクスを活用した循環器疾患における遺伝統計学分野の研究に従事し致しました。博士号取得後はバイオインフォマティクス研究の過程で出会ったさまざまなデジタル技術に興味を持ち、循環器内科専門医として診療に従事する傍ら、最新のデジタル技術の実臨床応用に向けたトランスレーショナル研究に注力し現在に至ります。

現在はトランスレーショナル研究として、スマホアプリをはじめとしたソフトウェアで病気の治療を目指す「デジタル療法（Digital therapeutics）」の開発、人工知能（機械学習、深層学習、大規模言語モデル等）を活用した医療ビックデータ解析、ならびにウェアラブルデバイスを活用した新しい心血管疾患管理に関する研究を進めています。このような研究にご興味のある同窓生の先生方がいらっしゃるようでしたら、ぜひお声掛けいただけますと幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

医学展2023

日時／令和5年11月4日(土)、5日(日)
場所／医学類キャンパス

この度は医学展2023の開催にご協力いただき誠にありがとうございました。

11月4日、5日の2日間で開催されました医学展は4年ぶりであるにもかかわらず、目標の2500人をはるかに超え、2日間で3502人の来場者をお迎えいたしました。幅広い世代の方にご来場いただき、大盛況となりました。十全同窓会の皆様には医学展の開催に向けての多大なるご支援ご協力を頂きましたことを、実行委員会一同心より感謝申し上げます。

今年度のスローガンは「夜明け」です。来場した皆様方に朝日のように希望と元気を届けていくことを目標に、前日までの準備そして当日の運営を進めてまいりました。当初、資金不足や人員不足が課題にありました。資金面では、備品の経年劣化等で出費がかさみましたが、多くの方のご支援によって来年度の繰越金も含め確保することが出来ました。人員不足については、医学類5年生を中心に後輩や先生方にもご協力いただき、当日の予想以上の来場者への対応を含め問題なく医学展を終えることが出来ました。

医学展当日は、会場に子どもたちや地域の方々の笑顔にあふれ、来場者の方には「楽しい体験をありがとう」「優しく教えてくれてありがとう」「ここに通える日がきたらいいな」「来年も是非来たい」「本当に貴重な機会だった」といった温かい声をいただきました。多くの方に医療を身近に感じていただき、医学展を楽しんでいただけたことが心から嬉しく、本当に胸が熱くなりました。運営側も、医学展を通して医療が地域にとってどれほど大切な存在であるのかを改めて感じるとともに、医学についての理解を深めることが出来ました。また、仲間と連携して一つのことを成し遂げていくことの難しさと協力し合うことの大切さを学ぶことが出来ました。

私は、今年度実行委員長を務められたことと、最高の同期とともに医学展を開催できたことを心からうれしく思います。今年度の医学展の成功は、当日足を運んでくださった方々や協賛してくださった企業や団体の皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

この医学展の歴史は後輩へと受け継がれていきます。来年度以降の医学展も今年度に負けないくらいに盛り上がることを期待したいと思います。今後とも皆様のご協力のほどをよろしくお願いいたします。

（医学展2023実行委員長
川合　育美：記）

病 院 紹 介

公立学校共済組合
北陸中央病院

当院の歩み

当院は、1964年当時、北陸地方に蔓延していた結核から、富山、石川、福井、新潟、長野県の公立学校の組合員とその家族を守るために開設されました。組合員のほとんどは公立学校の先生方です。小矢部市埴生地区という田舎に病院が開設された理由は、結核療養を行うためですが、結核の衰退とともに結核病床は閉鎖されました。一方、開設当初から組合員の健康管理にも力を注いでおり、組合員への人間ドック等の職域性事業を請け負って来ました。一方、小矢部市で唯一の総合病院であるため、地域医療を受け持つ市民病院的な役割も併せ持った病院として歩んでいます。

当院の現状

当院は現在、16科（内科、小児、皮膚、放射線、外科、整形外、脳神経外、泌尿器、婦人、耳鼻咽喉、眼科、麻酔、歯科口腔外、リハビリテーション、臨床検査、健康管理）を標榜しています。常勤医師数20名、職員数約280名（非正規職員を含む）の中～小規模病院です。常勤医師の出身医局は、金沢大学（内科、皮膚、外科、整形外、脳神経外、泌尿器、眼科、麻酔）、富山大学（小児、耳鼻、放射線、歯科口腔）、金沢医大（婦人）の3大学です。また、3大学からは週1以下のパート医師の派遣もいただいており、深謝申し上げる次第です。

当院の強みは第1に、砺波医療圏（砺波市、南砺市、小矢部市）で唯一の呼吸器外科専門医を有する事であり、近隣の病院・医院から多くの呼吸器外科疾患（肺癌、気胸、縦隔腫瘍など）の患者さんを紹介いただいており、年間の呼吸器外科手術数が80例近くに増えています。若手外科医にも手術経験を積んでもらい、成長する姿が見られて指導者として嬉しく思っています。高齢者の多い地域であるため、これまでに最高齢94歳男性の肺癌手術も経験し、その患者さんは元気に外来通院中です。一方、小矢部市から助成を受けている「肺癌ヘリカルCT検診」を活用して、肺癌の早期発見・早期治療にも努めており、毎年確実に早期肺癌の患者さんが見つかっており、多くの完治者を出しています。内科では、糖尿病、慢性腎臓病、冠動脈疾患などの生活習慣病や大腸ファイバー検査などで、最先端の診療を行っています。

学術面においては、少ない医師軍団ではありますが、田舎での診療経験を全世界に発信しようという気概を持った医師も多く在籍し、毎年4～5編の英文論文が上梓されています。私が常々口にしている「診療は地域を中心にLocalに、発信はGlobalに！」を実践しています。

今後の課題

高齢化と人口減少は、大都市を除いた全国各地で見られる現象ですが、小矢部市も例外ではなく、それらが加速度的に進行中です。その様な事情を踏まえ、当院としては急性期医療で「治す医療」だけでなく、回復期医療や慢性期医療も行って「支える医療」も行う必要があると考え、総ベッド数193床のうち、平成25年に「医療型療養病床」として53床、平成28年に「地域包括ケア病床」として53床を開設し、現在はケアミックス型病院として診療を行い、地域のニーズに答えています。病院経営的には、急性期医療のみの時代よりもケアミックス型医療を行っている現在の方が、経常収支が好転し、8年連続の黒字経営を継続しています。今後はさらに敷居を低くして、地域住民や組合員が来院しやすい病院となれるように、職員が一丸となって努力しています。

金沢大学病院や県都の大病院への集約化という波が押し寄せる現在、当院のような地方の中～小病院にとっては、医師確保が困難な時代になって来ました。十全同窓会の皆さまには、今後とも当院にご指導、ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

（病院長　清水　淳三：記）

概 要

公立学校共済組合　北陸中央病院
所在地　富山県小矢部市野寺123番地
病院長　清水　淳三
病床数　193床（一般急性期病床57床　地域包括ケア病床53床　医療型療養病床53床　人間ドック病床30床）
診療科数　16

沿 革

昭和39年	4月	公立学校共済組合員の結核対策および地元住民の一般診療病院として小矢部市埴生地区に北陸中央病院を開設（一般152, 結核48）
平成 6年	4月	結核の衰退により結核病棟を廃止（一般150, ドック36）
平成13年	10月	小矢部市野寺地区に新築移転（急性期169, ドック36）
平成25年	8月	医療型療養病床の開設（急性期110, 療養53, ドック30）
平成28年	2月	地域包括ケア病床の開設（急性期57, 地域包括53, 療養53, ドック30）
令和 6年	4月	開院60周年の予定

国民健康保険
能美市立病院

当院の歩み

能美市立病院は、1938年9月に、当時の石川・江沼・能美3郡の産業組合（現在の農業協同組合）が運営する「産業組合連合会加賀病院」として開院しました。その後、2度の改称を経て、2005年2月の能美市誕生に伴い「国民健康保険能美市立病院」に改称され、現在に至っています。地域とともに歩み、2023年10月に創立85年を迎えた自治体病院です。

当院の現状とこれから

2023年11月1日現在、当院の常勤医師数は計7名（内科4名、整形外科2名、眼科1名）です。当院の懸案（常勤医師の不足と加齢）を熟慮した結果、2018年4月から、医療の軸足を、急性期から回復期、慢性期、在宅医療に移しました。すなわち、当院での診療が困難と判断された患者さんは近隣の拠点病院に搬送し、症状が落ち着いたら、当院で回復期、慢性期、在宅医療まで、他職種が連携して親身に対応しています。

当院は附属施設として、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、能美市根上あんしん相談センター（地域包括支援センター）、介護老人保健施設「はまなすの丘」を保有しています。つまるところは、これらを当院の強みとして、地域包括医療に特化したシステムを構築し、その推進と充実をめざすことです。

在宅医療を充実させるため、2020年12月に「在宅療養支援病院」を取得しました。在宅療養患者さんに対して、24時間の往診と訪問看護が可能な体制を整え、いつでも入院できる病床を確保することで、患者さんは「ほぼ在宅」「いつでも入院」「わが家で看取り」という医療介護サービスを受けられています。

2023年4月には、各附属施設と患者サポートセンター（地域医療連携室）をすべて統合し、「地域医療推進センター」（愛称「まるっと」）を開設しました。各部門の連携が強化され、さらに充実した地域包括医療に取り組んでいます。今後は、健診機能を強化し（2024年4月に健診センターを開設予定）、「保健・医療・介護・福祉・生活」の融合を地域マネジメントする「共通プラットホーム」の創設を目指します。これが現在の「経営強化プラン」の柱のひとつです。創設に向け、能美市の医療介護ＤＸ事業と協働し、デジタル化を図るとともに、オンライン診療の開始に向け準備を進めています。

もうひとつの柱は、機能分化と役割の明分化です。専門医療提供病院や重症急性期病院との連携体制を強化し、当院は軽・中等症急性期、回復期、慢性期、在宅医療を担い、ポストアキュートやサブアキュートではどこにも引けをとらない地域包括ケア病床の特徴を打ち出していきます。近隣の公立病院とは、機能分化と連携をすすめており、2023年2月20日には、白山石川医療企業団との間で、広域医療連携に関する協定を締結しました。医師の外来派遣や遠隔読影による画像診断支援を受けています。

これからも当院は、地域包括医療の推進と充実をめざして、職員一同一丸となって取り組んでまいります。今後とも十全同窓会の皆さまのご支援ご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

（院長　水野　恭嗣：記）

概要

国民健康保険能美市立病院

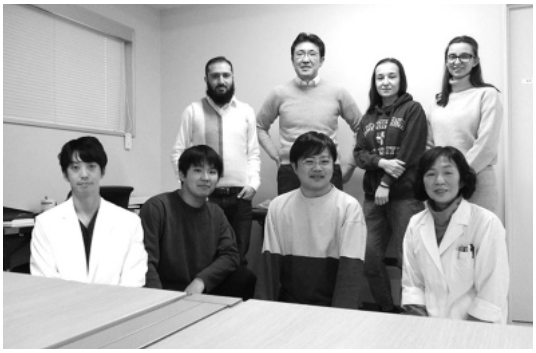
所在地	石川県能美市大浜町ノ85番地
病院長	水野　恭嗣
病床数	100床（急性期一般25床、地域包括ケア35床、医療療養40床）
診療科数	12

沿革

昭和13年　9月	産業組合連合会加賀病院として開院
昭和32年　6月	根上町国民健康保険直営加賀病院に改称
昭和41年　4月	国民健康保険町立根上総合病院に改称
平成17年　2月	能美市誕生に伴い国民健康保険能美市立病院に改称
令和　2年12月	在宅療養支援病院に指定
令和　5年　4月	地域医療推進センター（愛称「まるっと」）を開設

教室だより

革新ゲノム情報学



研究

私たちの研究分野では、主としてヒト多様性の観点から、様々なヒト疾患・形質の成因、発生機序の解明を目指した研究に取り組んでいます。ヒトのみならず、モデル生物・細胞も研究対象とし、生命現象の各階層（DNA、RNA、タンパク質など）について取得した大容量情報（オミックス情報）を用いて病因・易罹患性に関与する遺伝子や、診断に有用な分子マーカーを同定し、各病態や形質を体系的に理解することに特に力を注いでいます。加えて、生体分子のオミックス情報のみでなく、生活習慣・環境情報や画像情報などのビッグデータを医療に還元するための研究（Translational 'Omics' Research）にも取り組み、個々人の違いを考慮した個別化予防・医療の開発も目指しております。

1）多因子疾患・形質の成因解明に関わる研究
2）希少・未診断疾患、単一遺伝子疾患・形質の成因解明に関わる研究
3）ゲノム多様性、個別化予防・医療に関わる研究

国内外の大学・研究所などと共同で実施したゲノム全域にわたる多数の一塩基バリアントの遺伝型情報を用いたゲノムワイド関連解析や、全エクソーム解析や全ゲノム解析などからの最近の研究成果は分野のホームページ（https://big.w3.kanazawa-u.ac.jp）に掲載しておりますので、ご覧いただけますと幸いです。学際的な共同研究にも強い関心をもっており、学内では、先進予防医学研究センターや、医薬保健研究域附属AIホスピタル・マクロシグナルダイナミクス研究開発センター、サピエンス進化医学研究センターにおける研究活動にも積極的に関与しております。

金沢大学
医薬保健研究域医学系
革新ゲノム情報学分野

教育

教育活動を通じて、遺伝継承と多様性の科学としての遺伝学の根本原理や、遺伝学やゲノム医科学からの知見に基づくヒト疾病や形質の成因を理解することの重要性などを習得させることを目標としています。

医学類では「遺伝学」を担当し、「医薬保健学基礎Ⅰ・Ⅱ」、「プレゼン・ディベート論」、「基礎研究室配属」を分担しています。医薬科学類では「遺伝学Ⅰ・Ⅱ」、「ゲノム解析演習」を担当し、「大学・社会生活論」、「医薬科学研究者入門」、「医薬科学英語Ⅰ」、「医薬科学研究者養成Ⅰ」、「医薬科学基礎ローテーション実習Ⅱ」などの科目を分担しています。

大学院においては、先進予防医学研究科では「バイオインフォマティクス」、「ゲノム実習」を担当し、「オミクス解析」、「環境と遺伝」を分担しています。医薬保健学総合研究科では、研究分野特設科目（革新ゲノム情報学特論）を担当し、「環境・遺伝要因と健康総論」、「基礎系領域融合セミナー」、「予防医学概論」、「環境と健康」を分担しています。外部講師を招いて最新の研究成果などを講演していただく「革新ゲノム情報学セミナー（up-to-dateセミナー」も随時開講しております。また、卓越大学院プログラム・ナノ先制医学コース「未来型ナノ先制医学論」の科目責任を務めています。

おわりに

本研究分野のスタートアップを力強く支えてくれましたスタッフ3名（准教授、助教、特任助教各1名）は、それぞれ学外に新たなポジションを得て、医学・生命科学に関する研究・教育で活躍しています。次代の学術研究や高等教育を担う人材を輩出することができましたことは大変喜ばしいことです。研究意欲あふれる大学院生や学類生、今後加わってくれる新しいスタッフとともに、より一層研究・教育に励んでまいります。十全同窓会の諸先生方におかれましては、今後ともご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。最後になりますが、このような執筆の機会を頂戴いたしました絹谷清剛教授に感謝申し上げます。

（田嶋　敦：記）

スタッフ

教　授　田嶋　敦
技術補佐員1名
博士課程学生4名、修士課程学生1名
医学類MRT学生10名
医薬科学類学生1名

研究分野の沿革

2014年9月に分野再編により革新ゲノム情報学分野が新設され、田嶋敦が初代教授に着任しました。2016年度の先進予防医学研究科の開設、医薬保健学総合研究科の専攻改組に伴い、先進予防医学研究科先進予防医学共同専攻ならびに医薬保健学総合研究科医学専攻・医科学専攻に属する分野となり、現在に至っています。

消化器内科学

はじめに

教室の理念として、「消化器病学を極めよう。そして、患者、社会に貢献しよう」を掲げています。「研究：オリジナルな仕事をしよう」、「臨床：医療を通じて患者、社会に貢献しよう」、「教育：切磋琢磨し、自ら成長する教育研修を実践しよう」の3つのビジョンを掲げ、各ミッションに取り組んでおります。

診療

金沢大学附属病院の内科診療科において、当教室は消化器疾患を担当しています。肝炎、肝細胞癌は当教室の中心的な診療のひとつですが、近年は膵癌・胆道癌の症例が増加傾向であり、両疾患への超音波内視鏡や胆管鏡を用いた診断、全身薬物療法やドレナージ治療の場面が増えています。また消化管癌に対する内視鏡診断・治療もより高度化しつつあり、大学病院として求められる手技に対応するとともに、若手医師の教育活動にも力を入れております。炎症性腸疾患では、急速に選択肢が増えた新たな薬剤によって、外来で難治例の治療が遂行できる機会も増えています。

進行癌症例では、新規薬剤や新規治療法の積極的な導入に加え、包括的ゲノムプロファイリングに基づく治療や、企業治験、JCOG等の多施設共同試験、当科が全国多施設をリードした臨床試験を推進しています。またウイルス肝炎診療ではICTを利用した診療体制の構築やWHOコラボレーションセンターでの国際保健事業にも取り組んでいます。

年々、選択肢が広がり複雑化する診断、治療体系を踏まえ、消化器内科単独ではなく、消化管外科、肝胆膵移植外科、放射線科、病理部などとのユニットカンファレンスを経て、肝癌・胆道癌、膵癌、消化管癌における個別の最適な診断、治療法の設定を行っています。消化管外科との腹腔鏡内視鏡合同手術（LECS）、肝胆膵移植外科との生体・脳死肝移植への対応にも積極的に取り組んでいます。

教育

医学類教育では、診断学実習、栄養・消化器学系統講義（急性腹症・上部/下部消化管、炎症性腸疾患、肝疾患、肝臓病学の進歩、胆道疾患・膵疾患）、腫瘍学（消化器腫瘍の肝腫瘍、内視鏡治療）の講義を行っています。コアローテーションでは、ベッドサイドでの医療面接、診察を重視した患者症例検討を行い、超音波検査や内視鏡検査では見学のみならず実機やシミュレーターを用いた実技教育も行っています。大学病院における高度先進医療を体験、習得していただくのみならず、北陸三県の関連病院に協力いただき、学外実習も実施しています。

修士課程では内科学概論の講義を、博士課程では恒常性制御学特論、異分野研究探査の講義を行っています。

研究

「肝癌・膵癌バイオマーカー研究」、「肝炎ウイルス研究」、「肝癌と免疫に関する研究」、「腸内細菌研究」などを主な研究テーマとして、教室スタッフと大学院生が一体となって取り組んでいます。「肝癌・膵癌バイオマーカー研究」では、新たな肝癌マーカーであるラミニンγ2単鎖による発癌予測、治療後遠隔転移予測の検討に加え、膵癌診断への応用や発癌予防薬の開発にむけて取り組んでいます。また「肝炎ウイルス研究」では、B型肝炎ウイルスの排除を目指した創薬、新規免疫療法の開発、C型肝炎SVR後発癌の免疫機序の解明に取り組んでいます。探索的臨床研究を推進し、新たな診断治療法を世界に発信することで、世界の消化器病学・肝臓病学をリードすることを目指しています。

おわりに

教室員一同、消化器病学を通して診療、教育、研究、地域社会貢献を行い、教室の発展に向けて努力してまいります。十全同窓会の皆さまには今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

（山下　太郎：記）

スタッフ

教　授　　山下　太郎、本多　政夫（保健学系医療科学病態検査学）
特任教授　水腰英四郎（先端医療開発センター）
准教授　　山下　竜也（先進予防医学研究センター）、鷹取　　元（内視鏡センター）
特任准教授 寺島　健志（先進予防医学研究センター）
講　師　　荒井　邦明、飯田　宗穂
助　教　　島上　哲朗（保健管理センター）、山田　真也、丹尾　幸樹、
　　関　　晃裕、中河　秀俊、林　　智之
特任助教　高田　　昇（肝疾患）、宮澤　正樹（地域呼吸器症候学）
医員10名、医学博士課程33名、秘書6名、技術補佐員7名

研究分野の沿革

1883年佐藤廉が金沢医学校の初代内科教授として着任し、本学の内科学を開設しました。1897年講座制となり、以後100年以上、複数の講座内で消化器内科分野の診療・研究・教育活動が運営されてきました。2019年、本学の内科学再編に伴い、旧第一内科と旧第二内科の消化器グループが合併し、金子周一が初代消化器内科教授に就任しました。2022年山下太郎が第2代教授に就任し、現在に至ります。

支 部 だ よ り

福井県支部

令和5年8月27日、第73回十全同窓会福井県支部総会が越前市の料亭うおとめにて開催されました。

今年は、7月から連日猛暑が続き、当日も猛暑の中、約30名の会員の先生方にご参加いただき感謝申し上げます。

総会を始めるにあたり、昨年の総会以降にご逝去された11名の先生方への黙祷の後、議事に入り、はじめに久保田紀彦福井県支部長から挨拶をいただき、また今回来賓として十全同窓会本部より、同窓会会長の山本健先生、ならびに理事長の中村裕之先生にお越しいただき、両先生方から現在の十全同窓会の会員数、会費等の状況や、金沢大学医学部の研究活動の状況につきまして、少し厳しい状況にある事をお話しいただきました。

表祝では、福井赤十字病院長に就任された小松和人先生への就任祝がありました。

報告事項は、担当幹事より、令和4年度の会務報告、福井県支部会員数と会費納入状況について報告がありました。

協議事項として、令和5年度会務計画、十全同窓会福井県支部会計収支予算案および特別会計予算案が承認されました。また令和5年度福井県支部役員の改選について取り上げられ、次年度より新しい福井県支部長に平井淳一先生が就任される事が承認されました。最後に十全同窓会福井県支部会員名簿発行が令和5年冬の発行が決定しました。

十全同窓会福井県支部だよりについては、平野治和編集委員長から、昨年の総会で議論になった、著作権についての変更が説明され、承認されました。

以上の議事終了後、特別講演が福井大学学術研究院医学系部門内科学（2）分野の中本安成教授より『慢性肝炎から肝がんへの病態学』という演題で講演をいただきました。講演内容は、やや難しいところもありましたが、中本先生のライフワークである、この肝臓病学への研究に対する強い情熱を感じるお話しでした。

講演会終了後、参加者全員での記念撮影となり、会場を変えて、懇親会を行いました。

懇親会を始めるにあたり、開催当番である丹南地区を代表し、越前市支部長の堀川利彦先生の挨拶があり、越前の国府があったとされる武生に、来年の大河ドラマ『光源氏の君へ』の主人公紫式部が、父に従い、しばらく滞在していた事などを紹介していただきました。引き続き鯖江市支部の土屋雅之先生による乾杯の挨拶があり、懇親会が始まりました。総会後の懇親会の開催は4年ぶりで、久しぶりとのことで、参加いただいた先生方には、同級生や親しい先生方と、席を移動しながら、酒を飲み交わし、楽しんでいただいているようで、当番幹事としてほっとしております。約2時間の時間はあっという間に過ぎ、次期開催地区坂井代表の一二三宣秀幹事より挨拶があり、次年度より福井県支部長となる、平井副支部長の挨拶にて閉会となりました。

最後になりましたが、ご参加いただいた先生方には、開催当番地区として運営上至らなかった事も多々あったかと思いますが、ご容赦ください。本当にありがとうございました。

（津川　喜憲：記）

静岡支部

コロナ感染が漸くWithコロナのステージに移行した令和5年9月16日、オークラアクトシティホテル浜松にて、金沢大学十全同窓会静岡支部総会を開催しました。令和元年以来4年ぶりの開催で、当日は、同窓会本部より内分泌代謝内科教授篁俊成先生をお招きし、講座再編4年目となる金沢大学医学部の現況や糖尿病など生活習慣病の最先端の研究を拝聴しました。先生には、ドイツ出張直前という大変お忙しい中、新しい糖尿病性脂肪肝の概念など独創的な研究成果を遺伝子レベルで判り易くご教示いただき、医化学教室岡本宏先生、第1内科金子周一先生から脈々と受け継がれた研究者・指導者としての底力をひしひしと感じることができました。

当日は県内より14名が参加し、前支部長佐野勉先生ならびに金沢大学高安賞創設者の臼井滋先生より母校愛にあふれたご挨拶をいただいたのち、香林坊界隈でせせらぎの音を聞きながら青春を謳歌した金沢時代の想い出に花を咲かせていただきました。令和6年3月の北陸新幹線の敦賀延伸で福井、石川、富山の北陸地方の皆さまは大変盛り上がっていることと思いますが、静岡県は、東は伊豆半島から、三島、沼津、静岡、磐田、そして浜松と東西に長い県で、温暖な気候に加え、東京、名古屋、大阪など主要都市への交通の便も良好で、ややもすると温室の中でのほほんと過ごしてしまうきらいがあります。また多くの先生は卒業後浜松医大の臨床教室に入局し医師としての第一歩を踏み出しておられ、どちらかというと厳しい気候環境で医学の礎を学んだ金沢への想いは時の流れとともに薄らいでしまっている可能性があります。

そのような気候や交通の便に恵まれた静岡県ですが、現在120名あまりの同窓会員が、静岡県立がんセンター、静岡県立総合病院、浜松医大など基幹病院のスタッフのほか、県市医師会役員、地域医療を担う開業医として活躍されています。そのような中で、今年初めて同窓会に参加していただいた若手の聖隷浜松病院土手尚先生が、「今年救急医学会で久しぶりに金沢を訪ね、旧友たちと旧交を温めることができた。今度は是非県内の諸先輩と交流し同窓会の発展に貢献したい。」と発言されたのが強く印象に残っています。

来年は静岡がんセンター坂東悦郎先生の幹事で静岡市での開催を予定しています。北陸新幹線敦賀延伸という金沢・北陸にとって記念すべき来年こそ、もっと多くの先生方にご参加いただき、医師としての礎を築いた金沢での想いを蘇らせて母校と静岡との懸け橋になっていただけたら幸いです。

（岡井　　高：記）

出席者（敬称略）：前列左から鏡周治（昭和42年卒業）、臼井滋（昭和39年卒業）、篁俊成（昭和63年卒業）、佐野勉（昭和44年卒業）、岡井高（昭和52年卒業）　後列左から金田武志（昭和61年卒業）、石神直之（昭和55年卒業）、土手尚（平成23年卒業）、岩瀬敏樹（昭和62年卒業）、谷澤豊（平成7年卒業）、内田律子（平成9年卒業）、池谷直樹（昭和58年卒業）、加藤政利（昭和54年卒業）、坂東悦郎（平成4年卒業）、東茂樹（昭和52年卒業）

埼玉支部

2019年を最後に開催できていなかった埼玉支部総会が久しぶりに10月28日土曜日17：30から大宮駅前のパレスホテル大宮の宴会会場で開催されました。新型コロナウイルス感染症で開催できなかった間に新しい会員も増えたと予想されたため、交通の便の良い大宮に開催としました。しかし、他のイベントとも重なったためか、参加者数は金沢からお越し頂いた山本健十全同窓会会長を含めて16名とやや少なめでした。麻酔科医である山本会長のご威光により、普段は大変御多忙の麻酔科の先生など5名の新参加者があり、喜ばしいことでした。

総会では、当支部での今後の開催方針や参加者増加についての意見を交わしました。埼玉支部ではさまざまな医局関連の会員が多く、参加者に若干の偏りのあることが懸念事項です。より多くの参加者を増やしていきたいです。本部でも同窓会への参加者が減少しているとのお話しを聞き、問題意識を共有いたしました。埼玉支部からは、埼玉医科大学国際医療センター乳腺腫瘍科の石黒洋教授に「専門医以外にも知っていて欲しいがん薬物療法の基本」と題して、専門外の我々にとってもわかりやすいお話しをしていただきました。がんの薬物療法の御紹介から、化学療法後の脱毛予防の方法など興味深いお話しを拝聴させていただき、大変勉強になりました。本部の山本健会長からは、十全歴史小話「金澤医学館１期生の集合写真はどこで撮影されたか」というタイトルで探偵小説のように証拠を積み上げて、御説を紹介していただきました。湿板写真のレプリカを参加者に供覧していただきまして、好奇心をかき立てていただきました。後半は、懇談会にて参加者全員の御紹介から近況を伝えていただきました。埼玉支部会のできた経緯や有名戦国大名の直系子孫であるなど意外な内容や各会員の思わぬ接点が見つかって、親交を深めることができました。

初めての参加や久しぶりの対面もあり、初めは静かに挨拶などから始まりましたが、時間が進むにつれて、金沢の時代を思い出して自然と話が盛り上がりました。時間は通常より長めに設定しておりましたが、あっという間に終了の時間を迎え、お開きとなりました。

（久慈　一英：記）

参加記念写真（敬称略）：下段左から中山　光男（昭和57年卒業）、紫藤　明美（昭和57年卒業）、山藤　和夫（昭和51年卒業）、坂井　誠（昭和47年卒業）、山本　健（昭和48年卒業）、石黒　洋（平成3年卒業）、大谷　幹伸（昭和53年卒業）、久慈　一英（平成2年卒業）。上段左から北野　善郎（平成元年卒業）、市川　聡裕（平成5年卒業）、神田　浩明（昭和63年卒業）、鈴木　智成（平成6年卒業）、加藤　直子（平成2年卒業）、河野　正志（平成6年卒業）、辻田美紀（平成11年卒業）、鈴木　由梨奈（平成21年卒業）

三重支部

令和5年度十全同窓会三重支部総会は、令和5年11月12日（日）に三重県津市の料亭「はま作」で行われました。本年度総会には7人の会員の先生方に出席いただけました。三重支部では、支部長原田資先生（昭和46年卒業）のもと、今回の総会も、和やかに進行していきました。今回は新支部長に、伊藤敏秋作先生（昭和52年卒業）が就任され、三重県支部支部長の引継ぎが行われました。快くお引き受けいただいた伊藤敏秋先生、本当にありがとうございました。来年は今年以上に多くの先生にご参加いただける事を願っています（現在の三重支部の会員数は21名です）。

今回は4年ぶりの開催でした。会の初めに、令和2年に99歳で亡くなられた生駒一徹先生（昭和21年卒業）を惜しんで黙祷が捧げられ、生駒一徹先生の医学への探求心と、臨床を愛して止まなかった姿勢を振り返り、心を震わせました。

会計報告の後、原田資先生より、第3回金沢大学東海地区合同総会、令和5年度金沢大学医学部十全同窓会総会の報告がありました。その後、各先生方の近況報告と、最近の各臨床現場でのお話をうかがうことが出来ました。精神科が専門である私ですが、大変わかりやすく、また、研究や実臨床ととても興味深い内容でした。懇談会では各先生方の趣味のお話など、多くのお話をうかがうことができ、とても楽しく、勉強になりました。新型コロナウイルス感染症の広まりのため、4年ぶりの開催となりましたが、各先生方のお話を聞いたことで、これからのよい励みとなりました。また来年、先生方にお会いするまでに、一つでもよい臨床成果を出せるよう1年間、精進しようと思いました。そして懇談会も和やかな雰囲気のうちに終わり、閉会となりました。本当にあっという間の時間でした。また、来年の同窓会も楽しみにしています。今回参加できなかった先生方も、是非、次回のご出席をお待ちしています。

（黒川　義博：記）

後列左から：黒川義博（平成21年卒業、筆者）、中瀬玲子（昭和62年卒業）、大石晃嗣（昭和63年卒業）、春木祐司（平成17年卒業）
前列左から：伊藤敏秋（昭和52年卒業、新支部長）、原田資（昭和46年卒業）、近藤峰生（平成3年卒業）（敬称略）

岡山・香川支部会

令和5年度金沢大学十全同窓会岡山・香川支部会が12月2日(土)、又来軒岡山駅前店において開催されました。

毎年岡山支部の同窓会をこの時期に開催しておりましたが、令和元年を最後に新型コロナウイルスの流行のため3年間開催されておりませんでした。今回久しぶりの開催となり香川支部との合同同窓会としての開催となりました。

コロナ明けの忘年会シーズンのため予定が合わず、毎回出席されている常連の先生方の不参加が多かったのですが、参加者は三好恵一先生(昭和45年卒業)、浅海浩二(筆者岡山・香川支部長・平成8年卒業)、西川敏雄先生(平成11年卒業)、杉山成史先生(平成13年卒業)、松井大輔先生(平成20年卒業)の5名でした。

三好恵一先生は、長く香川支部長をされておりましたが、令和5年5月に私に香川支部長を交代することとなり令和5年12月まで、(私が香川に在住したまま)岡山支部長と香川支部長を兼任した状態でした。今回久しぶりに開かれた同窓会において、岡山支部長を杉山成史先生に交代することを承認していただきました。

美味しいお酒と料理をいただきながら、学生時代に戻ったように金沢での懐かしい話で盛り上がり、あっという間に時間が過ぎていきました。

また来年もお会いできることを約束して、会を終了させていただきました。

今回も幹事の杉山成史先生に大変お世話になり無事に会を終えることができました。来年度こそは早めに声をかけて参加者を増やし、金沢から遠く離れた岡山・香川での金沢大学出身者の繋がりを深めてまいりたいと思います。

（浅海　浩二：記）

茨城支部

令和5年12月16日(土)午後3時より、茨城支部総会が、金沢大学長の和田隆志先生、十全同窓会会長の山本健先生を来賓としてお迎えし、水戸京成ホテル11階、オーキッドルームにて開催されました。

新型コロナが５類移行後、久しぶりの総会となり、懐かしい旧友との再会に、皆さん大変和やかな楽しい会がスタートしました。大谷幹伸先生(昭和53年卒業)の司会で始まり、初めに支部長の諸岡信裕(昭和48年卒業)の挨拶の後、逝去された会員に黙とうを捧げ、山本同窓会長には、同窓会の近況報告をいただきました。同窓会に対して、新入会員の会費納入率が極めて低いこと、そして、金沢兼六園のあれこれ・日本武尊の銅像になぜ全く鳥が寄り付かないかの謎について、講演をいただきました。その謎については金沢大学元教授の廣瀬幸雄先生が研究し、イグノーベル賞を受賞したとのことです。

和田学長からは、金沢大学未来ビジョン「志」―オール金沢大学で「未来知」により社会に貢献する―について講演をいただき、あるべき姿に向けた取り組みとして、世界トップレベルの研究展開・社会の中核的なリーダーたる金沢大学ブランド人材輩出・医学系附属病院の取り組み・持続可能で自律的な運営経営等を詳細に説明されました。

その後、写真室にて記念集合写真を撮影し、懇親会会場に移動し、田崎喜昭先生(昭和32年卒業)の乾杯のご発声にて懇親会が始まりました。最初に、近況報告を、一番若手の宮本卓先生(平成27年卒業)を筆頭に田崎喜昭先生にまでお話を頂き、懐かしい、古き良き金沢大学学生時代の思い出にふけり、昔のお城の生協や学食の写真を見て感動を覚えました。

今回の出席者は8人と、少人数でしたが、しばらくお会いできなかった先生方とも楽しい時間を過ごすことができ、これからも、年齢を忘れて、心は学生時代に戻って、特に、若い先生方の参加を期待しております。よろしくお願いいたします。

（諸岡　信裕：記）

前列左から　水谷太郎(昭和52年卒業)、田崎喜昭(昭和32年卒業)、山本健会長(昭和48年卒業)、和田隆志学長(昭和63年卒業)、諸岡信裕(昭和48年卒業)、村松学長室長、2列左から　宮本卓(平成27年卒業)、黒澤美穂(平成19年卒業)、原田洋一(平成3年卒業)、仁平武(昭和58年卒業)、大谷幹伸(昭和53年卒業)

クラス会

昭和40年卒業生同窓会

霞の向こうに、冠雪の始まった白山が望める。近頃はこの時期に私たち四〇会のクラス会は開かれている。

2023年10月も半ばを過ぎた日、金沢の日航ホテルで4年ぶりに開催された。

生憎と、小雨のぱらつくやや肌寒い日であった。中に入ると、会場の広間は柔らかいクリーム色で、3つの円卓が程よい間隔で置かれ、周りを座り心地の良い椅子が取り囲んでいる。

参加者は22名、うち1名は同伴のご婦人である。最初に、近年亡くなられた10名の方について、事務局の斉藤建二君より報告がある。偶然とはいえ、その人数に胸が痛む。今までに、このかけがえない人生を終えられた学友は30名になる。一同、起立して黙祷を捧げる。

会の進行役は松本が受け持ち、世話人を代表し、津田功雄君が再会の喜びを述べる。遠来の参加者の中から、江畑敬介君が乾杯の発声を行い、宴が始まる。

しばらく間をおいて、60年前の映像が流れる。卒業アルバムより収録したもので、アルバムは、岩城紀男ら8名の編集委員の手になる労作である。入学して間もない頃の運動会。競技に、応援に、仮装行列と皆が沸いた。その後はお互い随分身近になった気がする。

専門に入ってからは、山田致知教授の解剖実習。写実の重要性を教えられた。階段教室では、見下ろされて、学友グループがぎごちない手付きで診察にあたる臨床講義。

課外活動も盛んであった。サッカーの球を前に草わらに腰を下ろす二人の仲間。小道具の椰子の葉陰で、颯爽とハワイアンを演奏する軽音学部。夏、北アルプスの縦走路を行く山岳部。イベントの後か、おでん屋「若葉」のカウンターを囲む面々に青春がはじける。

そうそう、学年には二人しかない「マドンナ」が肩を寄せて微笑んでいるショットも忘れずに入っている。

宴の半ば、今では永久幹事と称されてもよい斉藤建二君から発言がある。前任者の畷稀吉君の後を引継いで20年間になる。この間のクラス会の流れ、会計報告についてである。残金は38万円余とあり、明年度も金沢で開催すること、再来年度は卒業後60年の節目になるなど。

ついては、自分は倒れるまで事務局を続けるが、その後はよろしくと結ぶ。皆が一斉に拍手を送ったことは言うまでもない。彼は他にも、学友の不幸に際しては全員に情報の発信、ご遺族への対応をしてくれている。二度にわたる文集の発行にも責任者を務めている。

後半の部分で全員より近況報告が行われる。

今もなお、出席者の多くの方々は何等かの形で医療に携わっておられる。自らと、あるいは伴侶の病を克服して静かに暮らしている人達もいる。今では、身の丈にあった仕事をして、それでお金も戴けて有り難いと云われる人もいた。印象に残る言葉である。お開きに、森紀喜君の先導で「北の都に秋たけて」を皆で歌う。

二次会は渡辺騏七郎君の誘導で30階のラウンジへと場所を移す。グラスを傾け再び語らいの時は流れる。磨かれた窓の外は雨も上がり、澄み切った秋冷の夜気が満ちているのを感ずる。眼下にきらめく街の明かりを、遠く光の粒になるまで追うことができる。

午後11時を回ったころか、人影もまばらとなり自然と散会になった。

（松本　晴彦：記）

十全昔話

譫　妄

紺谷　昭哉
（昭和39年卒業）

西の空が茜色のオーロラのように神秘的に染まったと思う間もなく一転、バケツをひっくり返したかのような、滝のような激しい雨と強風が吹き荒れ、稲妻と雷鳴がとどろき、街路樹がなぎ倒されんばかりの暴風雨が眼前に広がる。よりによってこんな日に入院なんて、縁起でもないわと素直な思いを抱く自分がそこにいた。（実はこの日も真夏の炎天下にあった。）わが譫妄はこのような衝撃的且つあり得ない不自然な非日常的風景から始まった・・・。

某月某日の午後発熱、急性間質性肺炎で緊急入院。

主治医から今晩がヤマですね、救命は困難かもと告げられ（この時、自分はすでに意識朦朧、喪失、譫妄の世界にはいりこんでいた）、家族は右往左往、遺影の写真を探したりしていたらしい。

数日間生死の境を彷徨い奇跡的に回復、この世に戻ることができたが、この間絶え間なく筆舌に尽くし難い譫妄の画像の数々を見て聞いて、まさに得難い経験、いやバカバカしく、語るに落ちる光景の数々を目の当たりにし、これらをはっきりと脳裏に刻むに至った。

天空の一角から、姿は見えないが病気（肺炎）の主と自称する声が耳元に近づき、「お前は今懸命に俺様を打ち負かそうと頑張っているが、無駄だ。俺様に勝って、そのあとどうするつもりだ？その年で何ができる？諦めな、これ以上生きることを。その方が楽だぞ。」と囁く。その囁きに自分は何の感慨もなく、否定も肯定もせずに聞き流す。

次いで威容を誇る閻魔大王らしき姿が大地を踏み鳴らし威嚇しながら大声で登場。「さっさとあの世へ行ったほうがいいぞ、さもないと家族が皆酷い目に会うぞ」と脅迫。妻や家族がいろいろな場面、場所に幽閉され強烈な音と光・閃光で激しいイジメに苛まれる画像が止めどなく流れる・・・。

彼岸と此岸がないまぜになった恐怖の映像、巨大音響が鳴り響き、強烈な閃光、稲妻が激しく交錯し、それ対して怒ったり、悲しんだり、苦しんだり、悩んだりせず、何の感慨もなく静かにこれらをただ見ているだけの自分が常だった。

病状の深刻さと譫妄の激しさは比例することが多いとされる。恐らく自分のような激しい譫妄を経験した患者は少なくないと思われるが、多くはそのままあの世に召され、その内容を現世に語り伝えることができなかったのではないだろうか。

自分が経験した譫妄の一部をここに記すことができ、この世に舞い戻ることができた幸せをしみじみと噛みしめているところである。

その後は自分でも驚くほどの早さで病状が回復し、28日間の入院を経て退院することができた。無傷の生還ができた。プレドニンが劇的に効果的であった幸運と主治医の的確な匙加減の御蔭で暫くは娑婆の空気を満喫できそうである。

そして遺影探しの憂き目にあった妻のひと言。夫が死んだフリして帰って来た・・・。

令和5年度白衣授与式

十全同窓会より白衣を寄贈しました

令和5年度に臨床実習を開始する医学類4年生への臨床実習生（医学）認定証及び白衣授与式が、令和5年10月26日（木）に十全講堂において行われました。臨床実習生（医学）認定は毎年臨床実習開始前に行われ、診断学実習など所定の学類専門科目である基礎医学・臨床医学基礎の授業科目（48科目）に加えて、今年度から医師法改正により公的化された共用試験であるCBT（Computer Based Testing）およびPre-CC OSCE（Objective Structured Clinical Examination）に合格した104名が当日の授与の対象になりました。公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構（CATO）から成績判定保留となっていた13名の学生については合格通知後の令和5年11月24日（金）に別途、臨床実習生（医学）認定証及び白衣授与式を行いました。今年度は、医学類4年生117名全員が共用試験に合格し、診療参加型臨床実習に参加できることになりました。

10月26日（木）の認定証授与では、杉山和久医学類長から学生ひとりひとりに認定証が手渡され、続いて同窓会・医学類関係者9名（山本健同窓会会長、堀修医薬保健研究域長・学域長、蒲田敏文病院長、吉崎智一教授、谷口巧教授、稲木紀幸教授、高村雅之教授、山本靖彦教授、絹谷清剛教授）が手分けをして、左袖に英字の大学名が入った長袖白衣を、学生ひとりひとりに着せ掛けました。

杉山和久医学類長の訓示、堀修医薬保健研究域長・学域長および蒲田敏文病院長の祝辞に続いて、山本健十全同窓会会長が祝辞を述べました。山本の祝辞では、この白衣贈呈が十全同窓会OBのご寄附によって支えられていること、具体的には昭和33（1958）年に本学医学科をご卒業になった三木甫（みきはじめ）先生から、「後輩の学生諸君のために使ってほしい」と十全同窓会に賜ったご寄附に拠っていることを紹介し、「この白衣を身につける度に、大先輩から諸君への熱い想いを胸に刻んで臨床実習に励んでほしい」と祝意を贈りました。

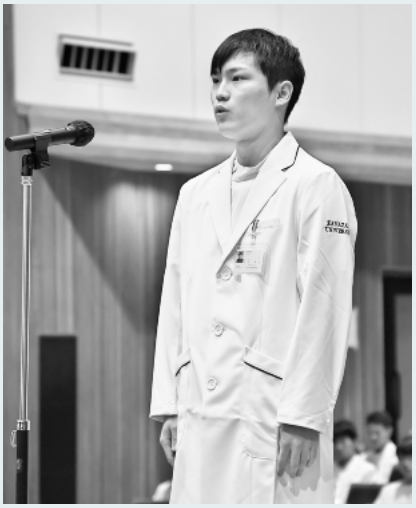
以上の訓示、祝辞に対して、臨床実習生を代表して吉田侑生君が宣誓を述べ、授与式を終えました。

令和5年11月24日（金）の臨床実習生（医学）認定証及び白衣授与式では、杉山和久医学類長、山本靖彦教授、野村英樹特任教授から13名の学生へ白衣授与を行い、杉山医学類長から訓示と激励をいただきました。

臨床実習生諸君の懸命な精進を願っています。

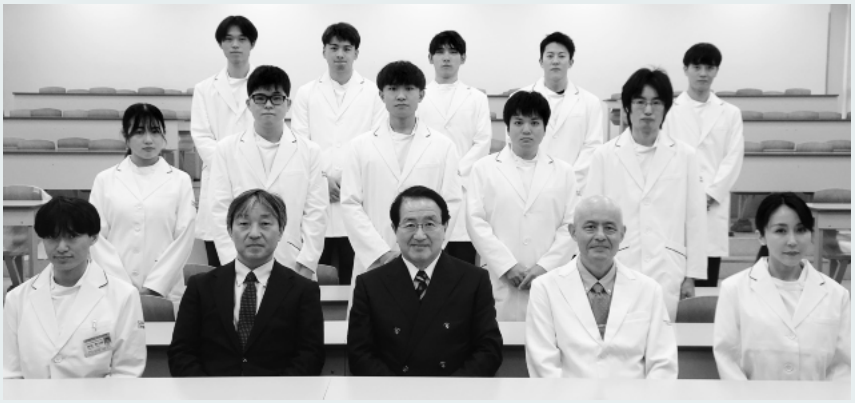
山本　健
山本　靖彦　記

白衣授与式を終えて



令和5年10月26日、臨床系統試験や共用試験の全てに合格した私たちは、無事にこの日を迎えることができました。白衣授与式において、臨床実習生認定証を受け取り、ドクターコートを着用させていただいたときに、いよいよ臨床実習で現場に立ち、実際に患者さんに接していくことになるのだと実感が湧きました。その後に先生方からの祝辞をいただく中で特に印象に残っていることがあります。それは、患者さんは医師にとってさまざまなことを教えてくれる先生であるということです。これまで基礎医学や臨床医学などさまざまな医学知識を習得してきましたが、知識を身につけることとそれを実際に活用できるということとの間には大きな違いがあります。患者さんはこの間の溝を埋めるための経験を与えてくれる存在であり、真摯に、積極的に臨床実習に参加することでこの機会を活かして自分の知識を深め、それらを活用する術を身につけていく必要があります。この、知識を身につけることと実際に知識を活用していくというサイクルを確立させ、生涯を通して学習する習慣を身につけ、患者さんや医学の発展のために学びを深めていきたいと思います。

私たちは、入学以来医学生として学びを深め、主に講義室で座学において医学知識の習得を目標に勉学に励んできました。しかしこれからは、実際に病院において現場に立ち、患者さんや先輩医師などの方々から多くのことを教えていただくことになります。その中で医師として必要な技術や態度はもちろんのこと、高い倫理観、責任感、使命感といった座学では学べないことを身につけることができる貴重な経験を多くしていくことができると思います。また、それと同時に多くの困難に直面していくことになると考えられます。そういった困難に直面した際に、最初は自分自身で考え、問題を解決する姿勢が必要ですが、考えが滞り詰まってしまったときには、同じ志を持つ仲間とその問題を共有して考えを整理してヒントを得て、時には先生方からのご指導を受けて、一つずつ乗り越えていきたいと思います。感謝の気持ちを常に忘れることなく、責任感を持って真剣に臨床実習に取り組み、新たな学びを得られるように一日一日を大切にしていきたいと思います。



最後になりましたが、白衣授与式を開催してくださった先生方や学務係の方々、その他関係者の皆さまに医学類４年生を代表して心より御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

（医学類４年　吉田　侑生：記）

金沢大学医学生と「生と死」を考える：麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告（その10）

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアセンター）
山田　圭輔

金沢大学医学類5年生の緩和医療臨床実習では、「これまでに人の生と死を考えさせられ、深く共感した書籍、映画、芸術、自分の経験などを1つ選び、人は死までをいかに生きることができるか、医療者はどのような支援ができるかに関する自分の考えを皆に紹介しなさい」という課題を与えています。

令和5年度の5年生の実習は10月から始まりました。医学生はさまざまな視点から課題に応えてくれます。本稿では、令和5年度5年生2名（寺田遼平君、山﨑真実子さん）のレポートを紹介します。（写真1、2）

写真1：
令和5年度J班の実習記念写真
後列：古谷、藤本、有島、筆者、船山、北村
前列：茶谷、寺田、西村、磯崎

写真2：H班の実習記念写真
後列：鈴木、舘、岡本、瀬島、遠藤、筆者
前列：備仲、前田、小笠原、吉野、山﨑

1）死を考えることは生きることの手助けになる

激しい痛みを伴う進行性脊髄疾患のため10代で下半身不随となったマリーケ・フェルフルート（1979～2019，ベルギー）は、2008年に安楽死の許可を得てからも車椅子アスリートとして活動を続け、2012年ロンドン・パラリンピックで金メダルを、2016年リオ・パラリンピックで銀メダルを獲得した。彼女は40歳で安楽死したが「許可を得られなければ自殺していた、安楽死の許可はより長く人生を送るためのものだった」と話していた。死ぬという選択肢が、彼女に生きる希望を与えたのである。

病気を治療することはもちろんだが、病気による絶望から患者を救うことも医師の大切な仕事の1つである。日本では安楽死は認められていないが、病気を抱えながらもその人らしく過ごしてもらうためのさまざまな選択肢の提示は、多くの死に直面する医師だからこそできることである。ただし医師がその人にとって最善の選択肢を提供するためには、他者の生き様、価値観やプライドを受け止める感性と器量が不可欠であり、我々は常にそれらを養っていかなければならない。

私は、今後に多くの人と関わり、さまざまな経験をし、さまざまな視点から選択肢を提供できる医師を目指していこうと思う。また、いつか死ぬ一人の人間として、後悔のないよう、縁と運を大切に全力で生きていきたい。

2）Being Mortal（A・ガワンデ、みすず書房）

V・フランクルの「夜と霧」を読み、苦難の中でも生きる意味を見出した彼の魂の強さに深い感銘を受けた。どんな状況でも人には選択の自由があり、その自由が常に私たちに問いかける。しかし、病気の苦痛や死に直面している人のことを考えた時、フランクルと同じように「苦難の中に意味を見出す」ことや「人生に答える」ことを求めるのは、酷なのではないだろうか。誰もが彼のような強さを持ち合わせているわけではない。Logotherapy（ロゴセラピー）を終末期の患者に施すことは難しいのではないかと感じる。

A・ガワンデの「Being Mortal（邦題：死すべき定め；死にゆく人に何ができるか）」の中で、この疑問に対する答えを見つけた。ガワンデは、生きる希望を失った患者にも何らかの生きる理由を与えることは可能だと示し、人は最期まで「自分らしい物語を築ける可能性」があり、時間とともに制約は増えるものの、医療者を含む周りの人々にもできることが残されていると述べる。

「生きる意味」が分からなくても「生きる理由」があれば患者は希望を持てるのではないだろうか。そして「生きる理由」を積み重ねながら自分の物語を綴り続けることで、患者は「生きる意味」を見出すことができるのではないだろうか。個々の患者の経験を尊重し、それを実現させる方法を模索することが医療者の役割だと感じる。「幇助される死よりも、介助される生は苦しいが、可能性もより大きい」というガワンデの言葉は、最期の苦しみの中を生き続けること、また医療者として患者にそれを促すことに、希望を与えてくれると思う。

金沢大学医学生と「生と死」を考える：麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告（その11）

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアセンター）
山田　圭輔

写真：令和4年度5年生B班
後列：要川、藤堂、二木、笠島、手塚、筆者
前列：城越、苗加、魚谷、井阪

令和4年度5年生3名（笠島怜君、村中貴君、北原誠太郎君）のレポートを紹介します（写真）。笠島君が示した死の5分類はとても興味深いものでした。医師は肉体の死（臓器障害、呼吸停止や心停止）ばかりを考えてしまいますが、死にゆく人やその家族と接する場合には、内面の死や2回目の死についても意識しておくことが必要です。村中君と北原君も、遺される人にとっての内面の死や2回目の死について述べてくれ、とても考えさせられました。3名は新年度から医師としての勤務が始まりますが、病気だけでなく、幅広く人間をみる視点を忘れずに活躍して頂きたいと願います。

1）アルジャーノンに花束を
（ダニエル・キイスのSF小説）

主人公のチャーリィとネズミのアルジャーノンが急激に高い知能を得て、それを失っていく過程での苦悩や葛藤と、それにまつわる人間関係を描いた物語である。この作品を通して、彼らが物理的ないし形而上的に死んだと捉えることのできる描写が5つある。

1）知能が上昇したチャーリィが、過去を振り返って自己の連続性を認識できなくなった時
2）人間関係も知能も失われていき、解決策もなく、癒しがたい孤独と絶望を抱えている時
3）知能の喪失が進んで自己の認識すらできなくなった時
4）肉体の死（心停止、呼吸停止、瞳孔散大）
5）彼らの存在が忘れられて、誰も語るものがいなくなった時

この中で医療がもっとも関与する分野は4）であるが、人が生きていく中で主に苦しむことは1）や2）の自己の認識のゆらぎや深い絶望感によるもの（内面の死）だと考えられる。

医療分野においても肉体的なケアだけでなく、心理的および人生観に対するケアを組み合わせたアプローチが重要である。そのような苦境で希望を持ってもらうことは困難を極めるが、それは本人のみが決定できることである。そのために医療者は、まずは身体の苦痛を除去することが重要で、そのうえで本人が生きがいや死ねない理由を持ち続けられる様に支援するコミュニケーションを模索することが必要と考える。

2）センチメンタルな旅・冬の旅
（荒木経惟の写真集）

荒木経惟（あらきのぶよし）は日本を代表する写真家で、エロス（生と性）とタナトス（死）を併せたエロトスを表現の根幹に据えている。彼の原点であり代表作である「センチメンタルな旅・冬の旅」は、亡き妻である陽子との出会い、日常生活、病気による離別、そして立ち直りを収めている。妻の死の前後の自身の心の動きを凝視し、表現しきった点でこの作品は傑出している。

一般に患者自身の苦しみに比べて、家族が感じる苦悩は注目されがたく、理解されていない。悲嘆に苦しむ家族が回復に向かう歩みを「グリーフワーク」、それを支援することを「グリーフケア」というが、有害な支援は悲嘆を複雑化してしまう。患者の死後に何度も消長する悲嘆への対処法に正解はない。

この写真集は、荒木本人にとってのグリーフワークである。妻を撮った膨大な写真を整理する中で、出会いから死別までの物語を見出したのだろう。作品は未来への兆しで終わるが、その後何十年も彼は「冬の旅」を回顧し、後の作品世界にも深く影響している。

病院において、家族のまなざしの先に臥す患者や、患者と家族の最期のやり取りは悲嘆の原因になるのだが、一方で家族が再び前を向いて生きる際の灯りにもなる。命の終りの厳かな空間で、医療者が家族に対してできることは、知識を備えた上で、言葉よりも先に寄り添うことだろう。

3）人が死ぬ時とは、人に忘れられた時である

医師法第一条によると、「医師の役割とは、医療及び保健指導を掌（つかさど）ることによって公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もつて国民の健康な生活を確保するもの」となっている。私は、この医師の役割に疑問を持っていた。人間はいつか必ず死ぬ運命にあり、医療には限界がある。どれだけ手を尽くしても、死が近づいている人を救命することはできない。その場合の医師の役割とは何であろうかと悩んでいた。

この悩みを晴らしてくれたのが、ONE PIECEに登場するDr.ヒルルクの言葉「人が死ぬ時とは、人に忘れられた時である」だった。この言葉を知ってから、死が近い人に対する関わり方が変わった。医師は、死にゆく人の疼痛や身体症状の軽減ばかりを考えがちだが、それでは病気や症状を診ただけで終わってしまう。そうではなく、亡くなった人の思い出を心に留めて忘れないことを、当人や家族や近しい人に伝え、その時間と場を設定することが大切なのである。

ゆえに医師が行うべきことは、患者さんや家族とのコミュニケーションを多く持つことである。患者や家族にしても肉体の死は受け入れがたいが、残る人が思い出を持ち続けることでその人が生き続けられると理解できれば、お互いが勇気を持って死と向き合えるのではないかと思う。そのような支援も忘れずに実践したい。

学生コーナー

ニューヨークでの研修

医学類5年
石井　裕子

私は昨年8月にAndrew Schneider先生が引率される”NYC Pre-Clinical Clerkship Program”に参加しました。ニューヨークでの研修はあっという間に過ぎていきましたが、特に記憶に残っているものについて記したいと思います。

最も印象的だったのは病院訪問です。私は金原聡子先生がいらっしゃるブロンクスにあるCommunity Healthcare Networkと、Andrei Rebarber先生がいらっしゃるマンハッタンにある産婦人科クリニックに伺いました。ブロンクスはニューヨークの中でも貧困率や犯罪率が高く、中南米からの移民が多い地域です。このクリニックでは保険を持っていない人の診療も行っており、患者層は様々です。またヒスパニックコミュニティやLGBTQコミュニティの強さも印象的でした。聞くところによるとブロンクスにはスペイン語しか話せない人が一定数いるようです。金原先生はスペイン語もご堪能で、ヒスパニック系移民の方々とスペイン語で会話し診察されていました。先生はテキサスでのレジデント中に、スペイン語が話せないと仕事が進まないということを実感し必死に練習されたようです。アメリカで暮らすためには日々変わりゆく多様性に順応しようと努力する必要があるように感じました。

一方、Rebarber先生のクリニックは産婦人科のエコー専門クリニックです。エコーのみを行う病院を日本で見たことはありませんが、米国では珍しくはないようです。診察では、技師がエコーを撮影・読影し、それを産婦人科医にプレゼンした後に、医師が最終的な診断を行ったり治療方針を決定したりします。またホームページを拝見したところ、「当院の治療は〇〇保険会社の△△タイプなら保険でカバーされますが、そうでない場合は全て自己負担です」と言及されていました。カルテや問診票に、加入している保険が明記されているのも日本では見ることのできない光景で米国での現実を見た気がします。

どちらか一方だけではなく両方のクリニックに伺ったことで、この経験がより印象深いものになりました。どちらのクリニックも日本では見かけることはできませんし、各々別の意味でアメリカを象徴していると思います。特に日米の医療の話題になると必ずあがる、保険制度の違いについて考えさせられました。日本の国民皆保険は一見、誰しも必要な医療を受けることができる素晴らしい制度のように思えますが、病院実習をしている今、その一言では済ますことはできないのではないかと疑問に感じることがあります。例えば糖尿病患者の中には、気が向いた時だけ薬を服用し、食事療法も守ろうとしないのに定期的に通院している人がいます。このような患者の診察費・薬剤費の一部も国民の保険料や税金で賄われているのです。一方、米国の医療制度に関して疑問に感じる点もあります。加入している保険によって実施できる検査・手術が異なるため、本来ならば手術が最善だと医師が思っていたとしても保険が障害となり手術を実施できないこともあるそうです。医師が本当に医師としてやるべきことができない時、もどかしく感じることはないのでしょうか。もちろん一言でどちらの制度がいいとは言えませんし、どちらにもメリット・デメリットはあります。しかし自国のシステムが全てだと思うのではなく、世界には多様な制度・価値観があることを知り、外に目を向け考えることも大切だと思い知らされました。

ところで話は変わりますが、SP（Standardized Patients）という言葉をご存知でしょうか。4年生以上の学生には想像がつきやすいと思いますが、日本ではOSCEの際に模擬患者を相手に診察します。SPはアメリカでいう模擬患者を指しますが、日本とは少々毛色が異なります。彼らはオーディション、トレーニングを受けた上でSPとなります。そして彼らは時間に応じて報酬を受けます。日本の模擬患者と異なる点は、全員が報酬を受けていることに加えて、事前に模擬患者の主訴や病歴だけではなく、性格も設定されていることです。設定はもちろん事前に医学生に知らされることはありません。例えば私が現地で初めて医療面接をさせていただいた時のSPは、イライラしているホームレスという設定でした。面接を始めた時からどことなく口調が攻撃的で目つきも落ち着いておらず、本当のホームレスを連れてきたのではないかと疑ったほどでした。聞いたところによるとSPの中には役者の卵や引退した役者も多いそうで、その演技力の高さに納得してしまいました。またホームレス以外の面白い設定としては、薬物中毒者や権利意識の高いセレブリティなどがあるようです。さらにはSPの人種や性別も様々で、中にはLGBTQの方々もいらっしゃいます。失礼のない性自認の聞き方を教えていただく機会もあり、貴重な経験となりました。

まだまだ書き足りませんが、この2週間は医学英語を勉強できたのはもちろんのこと、それ以上に日本にいては感じられないものを感じることができたことが一番の収穫でした。自分が日々当たり前だと思っていること、正しいと思っていることが実はそうではない可能性があることを忘れてはいけないと気づきました。これは将来の臨床や研究に活きるのみならず、日常生活で自分の人生を豊かにすることにも結びつくと思います。そしてこの研修に参加するといったように、新しいことを取り入れ自分自身を刺激し続けることが私の成長に繋がると学びました。

実習の中で

医学類４年
赤松啓太郎

坂を登る。丘の下から見上げれば、雨の一滴一滴がその建造物の大きさを、いつもよりも少し膨張させているように見えた。周りの同級生に遅れながら、辛うじて実習に参加させていただくことになった私は、彼らが受けたよりも一か月分余計に深まった季節の風を身に受けながら、大学病院へと向かうのだった。

カルテと真剣に対峙している白衣の背中に恐る恐る近寄り、声をかける。初対面の挨拶を済ませたその直後、指導医の先生が私に尋ねた。――成人発症スチル病って習った？、症状は？、えっとヘリオトロープ疹は皮膚筋炎だね――この患者さんのパルス、なんで四肢誘導で低くなってるか分かる？――浮腫の原因四つ、病態生理的に――そんなんじゃ何も診れてないよ――ネフローゼの定義、何だっけ――多分、じゃなくて、ほら調べよう――。少し大袈裟に言えば、それは洗礼だった。メモ帳の紙面の上でペン先は、脚を挫きかけながら疾走を続けている。自分の中に惰性で流れ続けていた緩徐楽章が、アタッカによって来るべき次の楽章に接続するのを、余りにも真新しいケーシーがたじろぎながら聴いていた。私の病院実習が始まった。

以来、日々の学びは実に豊かだ。朝に新調されたメモ帳は、その日の夕方には新しい情報でパンパンになっている。実習の後や中休みの時間になると、足早に図書館へと向かった。シャツの裾口をつまんで、山盛りの新鮮な果物を慎重に運ぶときのような危なっかしさで、頭の中のロウな知識を勉強机の上まで輸送する。机上にそれらを並べたなら、自分なりの丁寧さで、メモした内容を一つ一つ整頓するのだ。

そんなある時、浮腫の鑑別について調べるために、ガイトンを開いていた。すると、余りにも当然で、それでいてどこか印象的な記述に出逢った。

純水に溶質が加えられたなら、溶液における溶質の濃度は高くなる。言い換えれば、「水の濃度」は低くなる。そんな内容だった。あえて考えるまでもないような事柄に過ぎないが、「水の濃度」という表現がどうも気になった。そして、透明なグラスとそこに満たされた透明な水、その状況に宿る純粋な事情は何故か、病院での日々のことを思い起こさせた。

それはたとえばベッドサイドのことだった。患者さんと触れ合うのは楽しいよ、そんなことを先輩が言っていた。同級生の一人は、今から自分だけで患者さんの所へ行くことをどこか得意げに語った。私もベッドサイドに行けば、手を伸ばせば、患者さんはすぐそこにいる。そんなことを無邪気に想っていた。

実情では、患者さんは、途方に暮れるほど遠くにいた。そしてその遠さは、自分からにじみ出る未熟さに由来するものに違いなかった。私の緊張は、触診する手の曖昧さを通じて、いとも簡単に患者さんの表情を硬くした。ああ、この場所で不確かさとは、甘えでしかないんだ。ここはゴールじゃなくて私にとってのスタートなんだと、実習初日、当たり前のことが痛かった。今より前に進むために、確かさが、ほしかった。

一方で、その確かさへ伸ばそうとする自分の手を、触診する手と同じくらい曖昧で希薄なものとして見つめている自分が、背後にいるのを感じた。患者さんに介入していくために必要な確かさがまた別の、より確かな確かさをあたかもミュートしているように感じてしまうときがあった。カンファレンスに参加しているときやカルテと格闘しているとき、あるいは、シャントに組み込まれた患者さんの膨張した静脈について微視的に着眼しているとき、油断していると、患者さんの存在の確かさがみるみる後景に退いて、見えなくなった重さが耐えがたい軽さに転化していく、そのような危うい気持ちに襲われることがあった。

そんな折に同時に、寄り添う、という言葉の持つ、口に出す際の容易さと、実態の不確かさと、その言葉に酷似した欺瞞のことを思った。それから、先の水の記述のことを考えるのだった。医師になるからには、確かさを、求めたい。透明な水の存在感は、やはり透明なグラスの輪郭に支えられながら、その確かさを保ち続けている。勿論、そこにひとたび何かの溶質が加えられ、色や酸や塩基を帯びた途端、水が水のみで存在していること、そのことは事実ではなくなる。その系は「透明」から離れ、水の濃度は低くなっていく。それでも水はその系を確実に維持していて、そして実は、水の「透明さ」は消えていなくて、見えないところで呼吸をやめないでいる。見えないのは、無いからではなく、確かにそこに在るからだ、そんなことすら、ひそかに願ってみたくなる。

帰宅したアパートの窓からは病棟の明かりがよく見える。今、消えたのもある。今朝聞かせていただいた患者さんのロンカイは、明日には聞こえなくなっているだろう。手首にシャント造設した別の患者さんは、今夜、育つべき静脈を抱いて休まれるだろうか。

病院を眼差す視線を今度は内向きに、それと同じくらいの距離の深さで、心の奥へ向けた。病棟では時々、この道で自分を拓いていくのだという、ずっと前から抱いてきたはずの気概さえもが宙吊りになりそうになる。日々の、時に消化しきれないほどの含蓄に富んだ学びが、心の瓶底に沈殿しているそんな不安たちをうやむやにし、ささやかな希望を備給している。

――間違っても、何にもならないよ。

今、何もかもが不確かな私に、指導医の先生が留め置いてくれた言葉だった。

学生課外活動報告

西日本医科学生総合体育大会

第75回西日本医科学生総合体育大会（西医体）は、代表主管校大阪大学のもと、令和5年8月7日から8月25日の19日間にわたって開催されました。西医体は新型コロナウイルスの感染拡大とその蔓延防止のために4年間開催されませんでした。そのため、今大会で初めて西医体に参加する学生が多く、大会で成果を上げることを目標に各部活動で懸命に練習に励んでいたと思います。また例年問題となっている熱中症対策としまして、大会運営から全ての大会出場者に対し経口補水液の配布があり、大事に至ることもなく、大きな事故、怪我もなく無事に大会を終えることができたと思われます。

参加した学生の感想としては、「部活内で例年の西医体の雰囲気を知る人が少なく、勝負する相手を想像して自己鍛錬に励むしかなかった。そのため、練習のみでは不安に感じた」というものや「今回の西医体が最初で最後となるので、後悔のない試合にしようと思った」といった試合に向けたものや、「西医体は西日本の多くの大学が参加する大会で、その規模の大きさに感動した」といった大会それ自体に対するものなどさまざまでした。

4年ぶりに開催された令和5年度西医体は、大会に初めて挑む学生が多く、参加学年によっては最初で最後になる大会でした。コロナ禍で中止を余儀なくされ続けた西医体が開催されたこの年は、参加した学生にとって何もかもが新鮮で大会の雄大さに感動した学生が多いと思います。また、大会で努力が結実した学生、初めての大会でうまく実力を出せなかった学生、来年から大会に参加することになる学生など、大会を経験した学生はこの大会からさまざまな思いを抱くことになったと思います。

最後になりましたが、西医体に向けて仲間と切磋琢磨し練習に取り組んだこと、大会を通して感じ学んだことは私たち学生にとってかけがえのない経験になったと思います。このような機会を得られたのも十全同窓会の先生方のご支援あってのことであり、この場をお借りしまして、ご支援いただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。来年度の主管校は川崎医科大学となります。どの部活も、今大会の経験を生かして練習に打ち込み選手個々人が持てる実力全てを遺憾なく発揮できるように精一杯努力していきたいと思いますので、今後ともご支援のほどよろしくお願い致します。

（主な大会成績）

優勝

卓球男子ダブルス：舘康太朗/堅田晃史

準優勝

水泳女子200m個人メドレー：越智萌々香

卓球女子団体

剣道男子団体

３位入賞

サッカー部門

男子柔道団体

４位入賞

男子バレーボール部門

男子柔道個人：竹内悠人

水泳男子200mバタフライ：上田慎之助

陸上部門1500m総合、3000m障害総合：東俊太朗

（第75回西日本医科学生総合体育大会評議委員 中田　周平:記）

第17回金沢大学ホームカミングデイ開催

令和５年10月28日(土)、本学角間キャンパスにおいて、第17回ホームカミングデイを開催しました。４年ぶりに制限のない形での開催となり、歓迎式典には約180名、懇親交流会には約150名の同窓生等にご出席いただき、盛況な一日になりました。

歓迎式典では、最初に本学合唱団が校歌を斉唱しました。続いて、和田隆志学長の歓迎挨拶、安宅建樹金沢大学学友会会長の祝辞の後、山岸雅子理事・副学長から本学の近況が報告されました。

現役学生の現状については、学生の留学体験報告(１名)・大学院生の研究報告(１名)・課外活動体験報告(馬術部・１名)を実施し、出席者からは好評をいただきました。

特別講演では、「Working for Public Health @ 霞が関」と題し、前厚生労働省健康局長の佐原康之氏(平成元年医学部医学科卒業)にご講演いただきました。

歓迎式典終了後には、金沢大学学友会第13回役員総会が開催され、安宅建樹会長が再任されました。

夕刻からの懇親交流会は、安宅建樹会長の乾杯の発声で始まり、本学同窓生等の木管アンサンブル〈ナチュール・クインテット〉の素晴らしい演奏をBGMに、参加者の皆さんは旧交を温めていました。さらにフィナーレには、4年ぶりとなる校歌・寮歌の斉唱が行われ、大いに盛り上がりました。

また今年度は、ヴァーチャル空間に旧城内キャンパスを再現したヴァーチャルキャンパス見学会が開催され、参加者らは、母校の懐かしい学び舎へのタイムスリップ体験を楽しんでいました。

次回、第18回金沢大学ホームカミングデイは、例年より一週遅い令和6年11月2日(土)に開催が決まりました。紅葉に染まる懐かしい母校にぜひお越しください。

(基金・学友支援室長　松村　典彦：記)

特別講演を行う佐原氏

会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。
会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせいたします。

年額4,000円

①自動引き落とし（手数料本会負担）

お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛にお知らせください。

折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。

是非この機会にご検討くださいます様お願いいたします。

②銀行ネット決済（ネットバンキング）

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。

（お振込の際は、**ご氏名の前に会員番号のご入力**をお願いいたします）

北陸銀行　小立野支店

普通預金　６０５１０４７　金沢大学医学部十全同窓会 会費口

③払込用紙（手数料本会負担）

従来通り同封の「払込取扱票」をご利用ください。

＊ゆうちょ銀行は2022年1月より手数料を新設しました。

現金による払込みにつき、1件ごとに110円の手数料がご依頼人にかかります。

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局
TEL：０７６－２６５－２１３２　FAX：０７６－２３４－４２０８　Email：juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

寄附制度のご案内(金沢大学医学教育研究支援寄附金)

近年、国立大学法人の改革強化・促進が国の施策として急速に進められる中、医学類・医学系においても、実施すべき事業が次々と生じております。本来ならば、これらの事柄は大学の予算により実施すべきところですが、昨今、本学の財政状況は逼迫しており、部局に対して十分な予算措置が行われない状況です。

医学類・医学系としては、自助努力の方策を模索せざるを得ず、その一環として、平成26年９月に本学類・系が行う教育・研究に役立てることを目的とした≪金沢大学医学教育研究支援寄附金≫を起ち上げ、支援事業を推進して参りました。

本学の医学教育研究のさらなる充実発展のため、同窓会会員の方々におかれましては、今後とも格別の御支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

金沢大学　医薬保健学域医学類長
医薬保健研究域医学系長
杉山　和久

【担当(お問い合わせ先)】
〒920-8640　金沢市宝町13-1　医学類B棟1F
金沢大学医薬保健系事務部会計課経理係
Tel：076-265-2115　E-mail：t-keiri@adm.kanazawa-u.ac.jp

【お申込方法について】

- 電子メール又は電話でのお申込み
  上記担当まで電子メール又は電話にてご連絡ください。折り返し、申込書を送付させていただきます。
  現金のお持ち込みにより、ご寄附いただくこともできますが、その場合も上記方法によりあらかじめご連絡いただけますと幸いです。

【税法上の控除について】

- 寄附者が個人の場合は、所得税法上の控除対象となる寄附金として、確定申告の際、所得から控除され、税法上の優遇措置を受けることができます。また、石川県内在住者の寄附は、石川県や県内市町村からの個人住民税の控除を受けることができます。(※所得税法、地方税法ともに２千円を超える寄附額から控除対象となります。)
- 寄附者が法人の場合は、法人税法上の全額損金算入が認められる寄附金として、法人の所得から控除でき、税法上の優遇措置を受けることができます。

連絡先の変更・ご異動の際は、金沢大学医学部十全同窓会 会員情報変更サイトをご活用ください

URL　http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member

会員情報変更はこちら

ご不明な点は下記事務局へご連絡ください。

TEL：076-265-2132
Email：juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

会報編集委員の紹介

学内編集委員（23名）

蒲田　敏文
中村　裕之
横山　　茂（副編集委員長）
絹谷　清剛（編集委員長）
佐々木素子
篁　　俊成
和田　隆志
太田　邦雄
杉本　直俊
谷口　　巧
山本　靖彦
和田　泰三
高村　雅之
菊知　　充
中田　光俊
安藤　　仁
山下　太郎
岡島　正樹
稲木　紀幸
倉知　　慎
林　　克洋
毎田　佳子
濱口　儒人

学外編集委員（21名）

山口　成良
佐藤　　保
三輪　晃一
橋本　琢磨
中村　信一
勝田　省吾
山本　　健
山本　　博
山岸　正和
太田　哲生
大村　健二
横山　　仁
大島　　徹
横山　　修
中本　安成
高村　博之
常山　幸一
古川　健治
古市　賢吾
若山　友彦
中西　清香

以上44名で構成されています。

表紙の写真

病院前のロータリー

病院敷地内のロータリーバス停には市内中心部を運行するコミュニティバス「金沢ふらっとバス」が発着し、病院スタッフや患者さんの移動の助けとなっています。

題字：山本　　健（十全同窓会会長）

発行：金沢大学医学部十全同窓会
会報編集委員会
〒920-8640　金沢市宝町 13-1
http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp

発行日：令和 6 年 1 月 28 日

印　刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
2024年度の会費納入をお願いします。十全医学会とは別組織であることをご理解ください。

編集後記

新型コロナウイルス感染症が第5類感染症に分類が変更されたことに伴い、次々と学会活動を含め多くの研究活動が活発になり、コロナ感染症前の体制に戻りつつある状況です。金沢大学においても和田隆志学長のご指導のもと、全研究域での研究、教育のさらなるレベルアップを目指し、医学系、附属病院においても今まで以上の成果が期待されております。附属病院は本年3月までに第２中央診療棟が完成し、より高度な手術に対応できるように手術室の増改築、外来化学療法室の増床等、患者さんに利する多くの施設を整えることを目指しております。新しい時代の幕開けです。第2中央診療棟が完成しましたら、ぜひ見にきていただければ幸いです。診療も含め期待しながら見守っていただければ幸いです。

今回の会報も内容は盛り沢山です。日頃のお忙しい仕事の合間に気軽に見ていただければと思います。

（谷口　　巧：記）